

沖塚原東B遺跡発掘調査報告

— 射水市斎場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2019年

富山県射水市教育委員会

沖塚原東B遺跡発掘調査報告

— 射水市斎場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2019年

富山県射水市教育委員会

例 言

- 1 本書は富山県射水市沖塚原地内に所在する沖塚原東B遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は射水市斎場建設に先立ち、射水市市民生活部環境課の依頼を受け射水市教育委員会の監理の下、株式会社エイ・テックが実施した。
- 3 発掘区の地番・現地調査期間および面積は次のとおりである。

沖塚原146・147番地 平成30年8月20日～同年12月26日 発掘面積 2,300m²
- 4 整理作業期間は次のとおりである。

平成30年8月20日～平成31年3月15日
- 5 調査事務局は射水市教育委員会生涯学習・スポーツ課に設置した。調査関係者は次のとおりである。

[射水市教育委員会]

生涯学習・スポーツ課長；園木邦之
文化財係長；尾野寺克実
主任・監督員；金三津英則

[株式会社エイ・テック]

調査員；岡田一広
照査；田中宏明
施工管理技師；川淵久志

- 6 本書の編集は、監督員・調査員の協議の下、岡田が担当した。執筆は、第2章を金三津、他を岡田が担当した。
- 7 発掘調査および遺物整理の従事者は次のとおりである。（五十音順）

【現地調査】 赤尾安一・網谷勲二・伊藤恵美子・大上立朗・大田久美子・小林 央
齊木和佳・佐々木茂・条谷時雄・閔 杏介・多管朋文・田町 稔・塙田俊一
出口秋夫・寺岡秀作・平田菊男・福田恵子・松浦華織・八島 進・綿谷 忠

【整理作業】 相佐啓子・上田恵子・大上立朗・坂田智恵・閔 杏介・前馬みゆき・松本真由美
三島幸代・渡邊悦子
- 8 調査で得た図面・写真・遺物は射水市教育委員会で保管し、出土遺物には遺跡名を次の略号で記入している。 沖塚原東B遺跡；OTE-B

凡 例

- 1 本書に掲載の遺構図の方位は座標北、水平基準は海拔高である。
- 2 遺構の分類記号は次の呼称を踏襲した。

S A；柵址 S B；掘立柱建物址 S D；溝 S E；井戸址 S K；土坑 S P；ピット・柱穴
- 3 座標は公共座標（世界測地系2011、平面直角座標系、第VII系）を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。
- 4 遺構平面図の縮尺は1/200、遺構断面図の縮尺は1/60、遺物実測図の縮尺は1/4を基本とし、縮尺の異なる図面についてはそれぞれの縮尺とともにスケールを表記した。
- 5 本書で用いた土囊の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』に準拠している。

目 次

例言・目次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 1～3

第2章 調査に至る経緯 4

第3章 調査の方法と成果 5～7

　第1節 調査の方法 5

　第2節 基本層序 5

　第3節 遺構 6～7

　第4節 遺物 7

第4章 総括 8

写真図版

報告書抄録

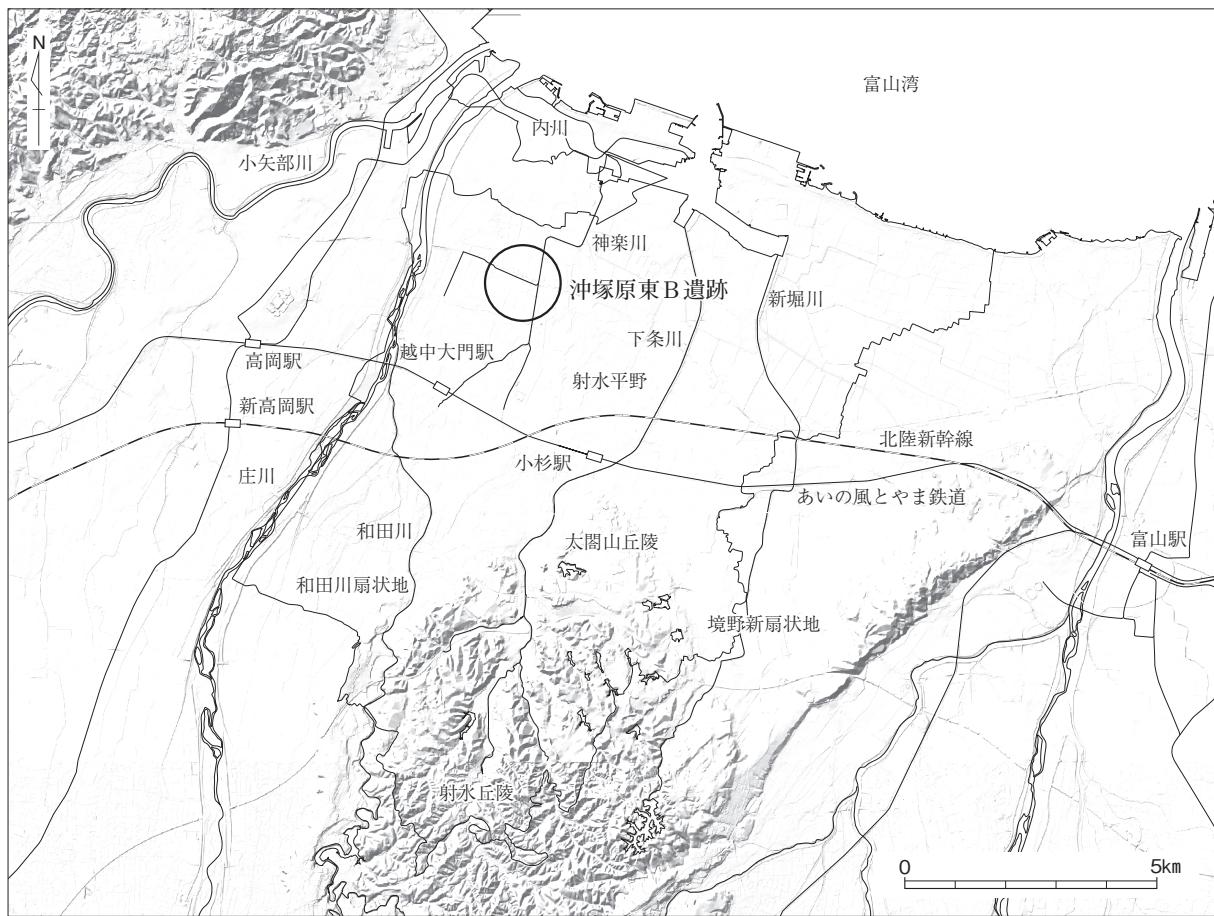
挿 図 目 次

第1図 沖塚原東B遺跡位置図〔1〕(1/15万)	1
第2図 沖塚原東B遺跡位置図〔2〕(1/5万)	2
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1/15,000)	3
第4図 調査地区位置図(1/5,000)	4
第5図 グリッド配置図(1/1,500)	5
第6図 基本層序模式図	5
第7図 図面配置図(1/500)	9
第8図 調査地区全体図(1/400)	10
第9図 遺構平面図〔1〕(1/200)	11
第10図 遺構平面図〔2〕(1/200)	12
第11図 遺構平面図〔3〕(1/200)	13
第12図 遺構平面図〔4〕(1/200)	14
第13図 遺構平面図〔5〕(1/200)	15
第14図 S B01実測図(1/80)	16
第15図 S B02実測図(1/80)	17
第16図 S A01・S E01実測図(1/80・1/60)	18
第17図 S E02~04、S K01実測図(1/60)	19
第18図 S E05~08、S K03実測図(1/60)	20
第19図 S D01実測図(1/200・1/60)	21
第20図 S D04・11・12実測図(1/200・1/60)	22
第21図 S D05・10・14~16実測図(1/200・1/60)	23
第22図 S D06・07・17、S K06実測図(1/200・1/60)	24
第23図 遺物実測図〔1〕(1/4)	25
第24図 遺物実測図〔2〕(実大・1/4)	26
第25図 遺物実測図〔3〕(1/4)	27
第26図 遺物実測図〔4〕(1/4)	28

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

射水市は富山県のほぼ中央に位置し、市域は東西約11km、南北15kmで総面積109.18km²である。北部に富山湾、中央に射水平野、南部に射水丘陵を配し、標高0～140mを測る。富山市・高岡市と隣接し、交通の便に恵まれていることから、住宅団地造成が頻繁に行われ、ベッドタウン化が進んでいる。現在の人口は約9万5千人余りである。

射水平野は、東の神通川と西の庄川に挟まれた東西約11km、南北約7kmの範囲の低湿地帯である。およそ1万～8千年前に形成された複合扇状地性三角州沖積平野で、河川によって運ばれた土砂や粘土・礫が堆積している。この沖積層が堆積した時代は海岸線が沖へ後退して平野部は現在より広かつたとみられ、その後は繩文海進とよばれる気候変動と海面上昇により、海岸線が陸へ進行し平野部が狭まり、現地形で標高約5m以下は海面下に没することとなる。やがて寒冷化による海面後退、河川の土砂が堆積することによってかつての海は小さく放生津潟（現：富山新港）としてのみ形を残し、周辺に湿原が現れる。この湿原は放生津潟の水面と標高差が殆どないため、河川の流れが澱み沼沢地を形成、湿原の植物が枯れて泥炭が堆積し、平野部が開けていくことになる。また、射水丘陵は新生代第三紀の青井谷泥岩層を基盤とし、上層に礫と砂泥からなる日ノ宮互層と太閤山火碎岩層が堆積している。鍛治川・下条川・和田川やその支流によって河岸段丘や樹枝状の谷間が形成されている。現在、市内には459箇所の集落が密集し、平野部に集落遺跡、丘陵部に生産遺跡の立地が多く確認されている。



第1図 沖塚原東B遺跡位置図〔1〕（1／15万）

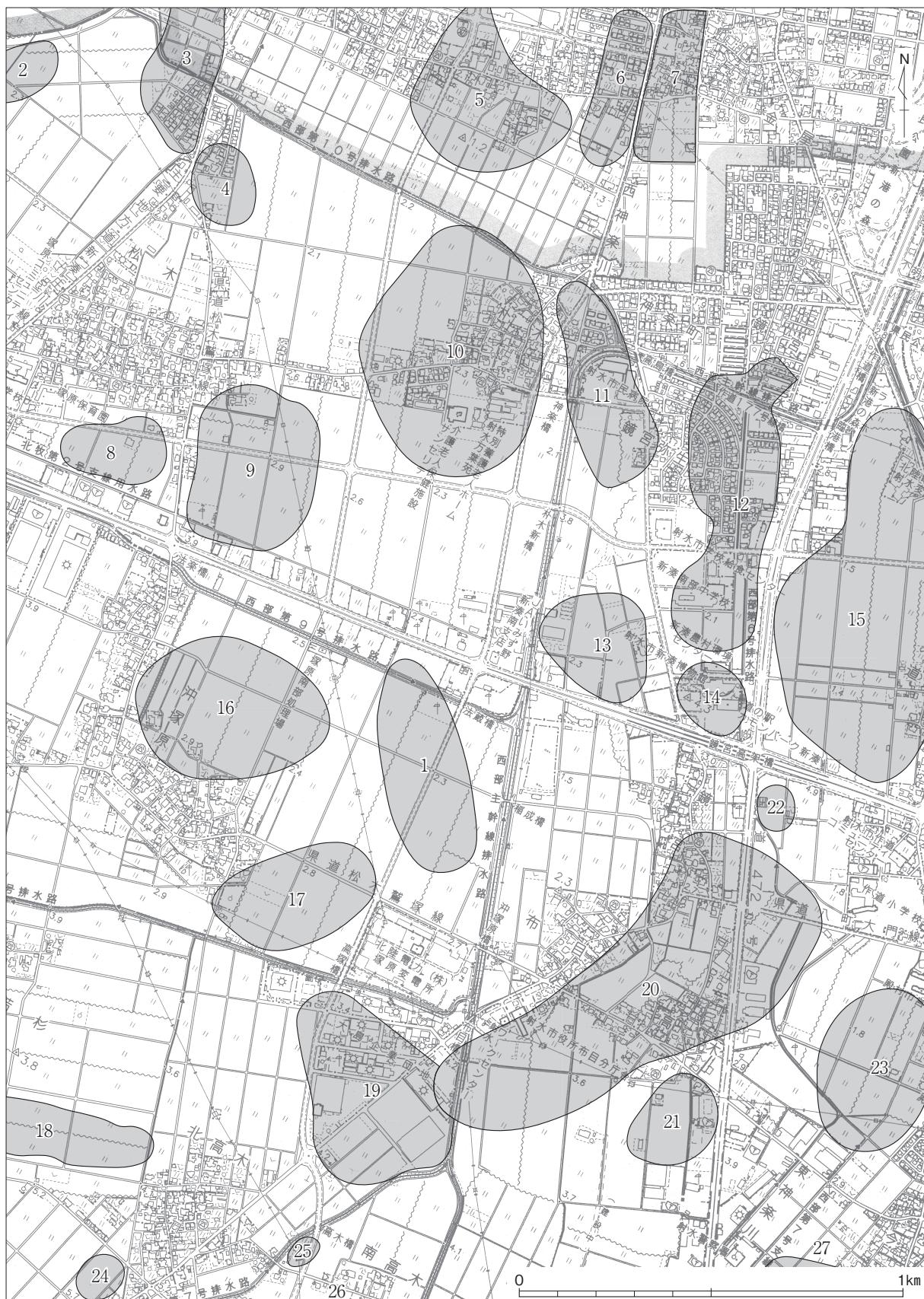


第2図 沖塚原東B遺跡位置図〔2〕（1／5万）

丘陵部では国指定史跡の小杉丸山遺跡、小杉流通業務団地内遺跡、上野南遺跡、赤坂A～D遺跡など生産遺跡が集中している。これらの遺跡は須恵器窯跡約39遺跡、製鉄遺跡約147遺跡を数えており県内最大規模を有する。須恵器生産窯跡や鉄生産製鉄炉と炭窯、工人の住居や作業場が見つかり、窯や炉を築くのに適した地形、粘土や薪・水の供給源が豊富にあることが好条件であったと考えられている。平野部では河川に近い地域に高島A遺跡、北高木遺跡、二口油免遺跡、小杉伊勢領遺跡などの集落遺跡が分布し、竪穴住居や掘立柱建物、溝や井戸などが確認されている。生産地である丘陵部と消費地である平野部を河川が結んで、交通路として機能しているために集落が営まれてきたと考えられている。

沖塚原東B遺跡は、庄川右岸に形成された標高約1.8m前後の沖積低地で、当遺跡の中央部を昭和46年に完成したほ場整備以前は西神楽川が北流しており、この西神楽川が形成する自然堤防上に立地する。中世を主体とした遺跡で、その他に縄文晩期の土器や弥生土器が採取されている。平成5年に発行された富山県埋蔵文化財包蔵地地図では沖塚原東A～C遺跡が登録されており、平成9年に実施した分布調査の結果により、沖塚原東C遺跡を沖塚原遺跡、沖塚原東A遺跡は南半部を範囲とした。当遺跡は、従来の範囲および沖塚原東A遺跡の北端部を包括して、現在の範囲となった。

当遺跡周辺は、縄文時代晩期以降の遺跡が確認でき、弥生時代中期以降は活発に遺跡が展開する。高島A遺跡では弥生時代中期の平地式住居や方形周溝墓を検出した。北高木遺跡では奈良平安時代の人形、斎串や人面墨書き土器等の律令祭祀遺物が出土した。中世になると日本海側の海上貿易が活発化し、鎌倉時代の放生津は随一の関東御免津軽船を所有するなど繁栄した。この放生津に鎌倉時代末期には守護所として放生津城が築城され、室町時代には將軍足利義材が下向するなど政治的拠点となる。



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 / 15,000)

1. 沖塚原東B遺跡
2. 松木七口遺跡
3. 中曾根西遺跡
4. 松木遺跡
5. 中曾根遺跡
6. 中曾根館遺跡
7. 牧野金屋遺跡
8. 松木大ノ田遺跡
9. 松木中鹿遺跡
10. 朴木C遺跡
11. 朴木A遺跡
12. 高島A遺跡
13. 鏡宮北遺跡
14. 鏡宮II遺跡
15. 作道遺跡
16. 沖塚原東A遺跡
17. 沖塚原東A遺跡
18. 中野B遺跡
19. 北高木遺跡
20. 高木・荒畑遺跡
21. 南浦遺跡
22. 鏡宮遺跡
23. 今井西遺跡
24. 小島遺跡
25. 南高木A遺跡
26. 南高木B遺跡
27. 今井南遺跡

第2章 調査に至る経緯

現在の射水市斎場は、昭和42年の供用開始から50年が経過しており、施設の老朽化や高齢化の進展による将来的な火葬需要の増加への対応が必要であったため、射水市では、これまで施設の規模や候補地の選定作業が継続的に行われてきた。

平成28年8月、射水市と斎場建設候補地であった地元沖塚原自治会との新斎場建設に関する基本合意に達したことで、斎場建物を中心とした施設配置等の整備計画が具体化した。また、斎場敷地の西側に隣接して、沖塚原集落との緩衝帯となる緑地公園の整備も並行して実施されることとなった。

事業計画地には、周知の埋蔵文化財包蔵地である沖塚原遺跡及び沖塚原東B遺跡が所在しているため、整備担当課との協議により、平成30年度に、斎場用地及び緑地公園用地全域の46,399m²を対象として事前の試掘確認調査を実施することとなり、平成30年6月18日～26日にかけて、射水市教育委員会が主体となって試掘確認調査を実施した。

調査の結果、沖塚原東B遺跡の範囲において、弥生・古墳時代及び中世の遺構・遺物の広がりが確認されたが、これまでの事業の経緯や施設の性格上、候補地の再選定や建物配置等の計画変更は困難であった。

整備担当課との協議により、やむを得ず埋蔵文化財に影響が及ぶ建物建設範囲の約2,300m²を対象とし、射水市教育委員会の監理のもと、発掘調査業務を民間業者へ委託して記録保存目的の本発掘調査を実施することとなった。

平成30年7月13日、射水市と射水市教育委員会との間で、射水市斎場建設事業地内における埋蔵文化財の保護措置に関する協定を締結。指名競争入札を経て、株式会社エイ・テックが調査担当業者に決定し、平成30年8月20日より現地における発掘調査に着手した。



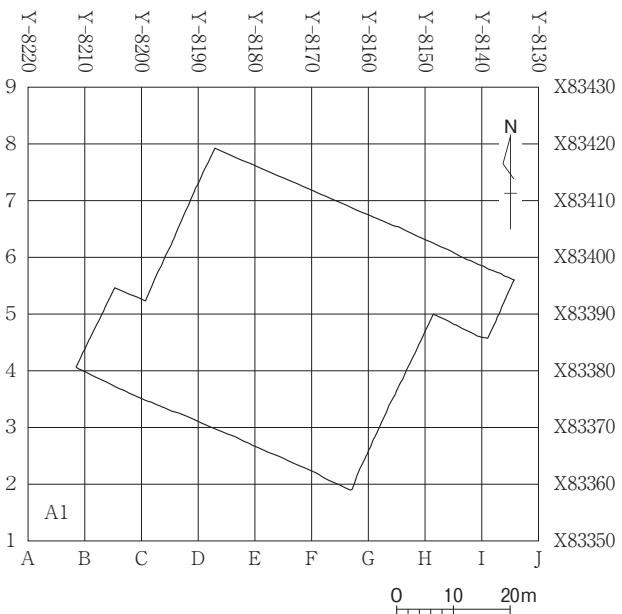
第4図 調査地区位置図（1／5,000）

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

重機で耕作土を除去し、その後作業員を投入して包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。作業の進捗状況に応じて写真撮影、遺構平面図・断面図作成などの記録・図化作業を順次実施した。写真撮影は 6×7 中判およびデジタル一眼レフカメラ（3600万画素）で実施した。遺構平面図作成においては、トータルステーションおよびドローンによる空中写真測量を実施した。

調査地区には $10m \times 10m$ のグリッドを設定し、世界測地系（2011）で平面直角座標系の第VII座標系（原点は北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ ，東経 $137^{\circ} 10' 00''$ ）に合わせた。東西方向をアルファベット、南北方向を数字を付して表記し、グリッド南西隅の杭名がそのグリッドを表すものとし、A1の地点は、原点より西へ8.220km、北へ83.350km向かった位置である。



第5図 グリッド配置図（1/1,500）

第2節 基本層序

調査区の基本層序は4層に区分される。各層序は以下の通りである。

第I層は、黒褐色細粒砂質シルトで現在の耕作土である。厚さは10~20cmを測る。

第II層は、黒色細粒砂質シルトで旧耕作土である。ほ場整備により削平されており、部分的に堆積が認められる。また、この土層の一部は中世遺構の上層覆土となる。厚さは5~8cmを測る。

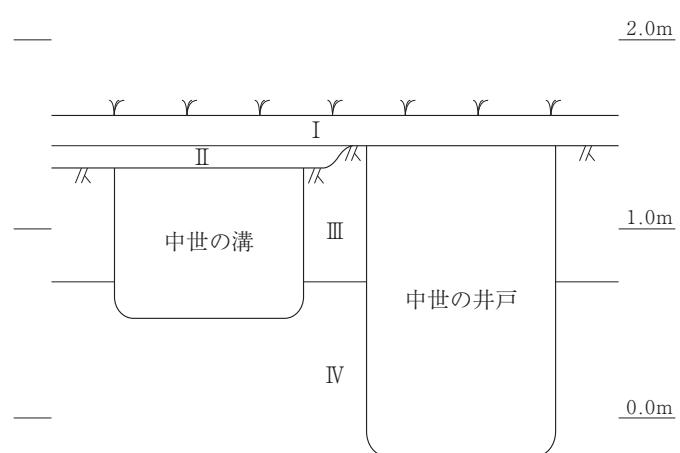
第III層は、にぶい黄橙色粘土質シルト

で、この層の上面が遺構検出面である。

この層中では遺物の包含は認められないため、これより下層は地山と判断する。

第IV層上面は、現況地盤より約10~20cmの深さで検出できる。厚さは40~60cmを測る。

第IV層は褐灰色中～細粒砂で、地下水を豊富に含んでいる。このため、井戸や溝はこの層まで基本的に掘削する。標高-20cmまで確認したが、それより深く堆積する。



第6図 基本層序模式図

第3節 遺構

掘立柱建物址

1号建物（SB01、第8～10・12～14図、図版5・6）

調査地区の南側、D3～E4区で検出した。南北棟で総柱の掘立柱建物址である。桁行3間（6.5m）×梁行2間（4.9m）である。棟方位は真北より12° 東に偏っている。掘り方は直径24～40cmの円形を基本とし、内部に柱穴をもつ。深さは10～24cmを測る。

2号建物（SB02、第8・10・13・15図、図版5・6）

調査地区の南側、E3～F4区で検出した。南北棟で総柱の掘立柱建物址である。桁行3間（6.9m）×梁行2間（4.5m）である。棟方位は真北より12° 東に偏っている。掘り方は直径24～40cmの円形を基本とし、内部に柱穴をもつ。深さは10～24cmを測る。

柵址

1号柵址（SA01、第8・10・13・16図、図版5）

調査地区の南側、E3～E4区で検出した。L字状の柵址である。SB02に添っていることから、この掘立柱建物に附隨する柵址の可能性がある。

井戸址

1号井戸（SE01、第8・10・13・16図、図版7）

調査地区の中央部、E4区で検出した。平面形は長方形で、井戸本体は西半部に位置する。規模は長軸3.40m、短軸2.65m、深さ1.00mを測る。出土遺物は土師器、珠洲、木製品（櫛、箸）、編物である。井戸側は抜き取られた可能性がある。図示した遺物は第23図5、第25図40～45・49・53・56・65～68、第26図75、図版15～79・80である。

2号井戸（SE02、第8・10・13・17図、図版7）

調査地区の中央部、F5区で検出した。素掘り井戸で、平面形は円形である。規模は直径1.38m、深さ1.00mを測る。出土遺物は、木製品（箸）である。図示した遺物は第25図69である。

3号井戸（SE03、第8・10・13・17図、図版7）

調査地区の中央部、E4区で検出した。曲物積上げ井戸で、平面形は円形である。土坑SK01に切り、SB01と重複する。規模は直径1.40m、深さ1.05mを測る。井戸側は直径45cmを測り、2段検出した。出土遺物は土師器、木製品（箸・井戸側）である。図示した遺物は第25図51、図版15～76である。

4号井戸（SE04、第8・10・13・17図、図版7）

調査地区の東側、G4区で検出した。素掘り井戸で、平面形は隅丸方形である。規模は長軸1.84m、短軸1.60m、深さ0.78mを測る。出土遺物は珠洲、木製品（箸）である。図示した遺物は第25図51である。

5号井戸（SE05、第8・9・12・18図、図版8）

調査地区の西側、B4区で検出した。現代の暗渠に切られる。素掘り井戸で、平面形は円形である。規模は、直径1.80m、深さ0.85mを測る。井戸の中心部には岩崎石あり、廃棄時に据えたものと推測できる。出土遺物は弥生土器、土師器、珠洲、銅錢である。図示した遺物は第24図36である。

6号井戸（SE06、第8・9・12・18図、図版8）

調査地区の西側、B4区で検出した。SE07に切られる。曲物積上げ井戸で、平面形は橢円形である。規模は、長軸1.50m以上、短軸1.05m、深さ1.60mを測る。井戸側は直径58cmを測り、3段検出した。出土遺物は珠洲・木製品（井戸側）である。図示した遺物は第24図36、図版15～77・78である。

7号井戸（S E07、第8・9・12・18図、図版8）

調査地区の西側、B 4区で検出した。S E06を切る。素掘り井戸で、平面形は橢円形である。規模は、長軸1.50m、短軸1.38m、深さ0.90mを測る。出土遺物は珠洲である。図示した遺物は第23図15である。

8号井戸（S E08、第8・10・13・18図、図版8）

調査地区の中央部、E 4区で検出した。S K03に切られる。素掘りの井戸で、平面形は円形である。規模は、直径1.14m、深さ0.93mを測る。出土遺物は、土師器、珠洲、漆器椀、箸、粘土塊である。図示した遺物は第25図39・46・47・50・54・55・57～64・70・71である。

溝（第8～12・19～25図、図版12・13）

溝はいずれも区画溝で正方位基調とする。いずれの溝も掘削時に分割されている。分割された位置が溝の交点となる。溝の分割箇所は、S D01では溝幅と同じで深さが浅い溝、S D04・06・07では幅が狭い溝がそれぞれ掘削する。

第4節 遺物

縄文土器・弥生土器（第23図1～3）

1は縄文土器で粗製の深鉢である。時期は後期後半～晩期前葉である。2・3は弥生土器である。2は短頸壺である。3は無頸台付壺である。いずれも弥生時代後期中葉のものである。

土師器（第23図4～13）

いずれも非口クロ整形の土師器の皿である。4～6は口縁部が外上方へ延び口縁端部がややつまみ上げる。9は口縁部が外上方へ延び口縁端部に面を形成する。7・8・10～13は口縁部が短く立ち上がるるものである。

珠洲（第23図14～23、第24図24～27）

14～23擂鉢である。16は口唇面に波状文を施す。19は口縁部内面に波状文を施す。24～26は壺である。27は甕である。14・15・17・18・20～27は珠洲III期、16は珠洲V期、19は珠洲VI期である。

瀬戸美濃（第24図28）

皿である。見込みに陰刻で印花文を施す。

白磁・青磁（第24図29～35）

29は白磁の椀の底部である。30～35は青磁である。30～33は椀である。30は外面に鎧連弁紋を施す。31は内面に陰刻で施文する。34は見込みに陰刻で施文する。35は盤の口縁部である

銅錢（第24図36・37）

36は照寧元宝（初鑄；1068年）である。37は錢名が不鮮明である。

木製品（第25図38～71、第26図72～75、図版15～76～78）

38・39は漆器椀である。口縁部は内湾して立ち上がる。内外面に黒漆を施す。40は横櫛で断面形はV字形である。背が水平になり肩が張るものである。41は曲物部材である。42～71は箸である。細い棒状の材の側面や端部を削るものである。断面形は多角形で、先端を丸く面取りしているものもある。径が7mm以上で長さ25cm以上のものと、径が7mm以下で長さ21cm前後のものの2種類がある。72・73は杭である。74・75は部材である。75は受け部とほぞ穴がある。75は中心部に半円形の突起がある。76～78は井戸側である。曲物で井戸本体の周りを薄い曲物3段で囲んでいる。

編物（図版15～79・80）

同一個体で網代編みのザルである。編み方は、2本超え2本潜り1本送りである。

第4章 総括

今回の調査では、中世の区画溝で囲まれた集落址を検出した。時期は珠洲編年（吉岡1994）でⅢ期を主体とし、Ⅵ期が下限である。しかしながら遺構から出土したものはⅢ期を主体とし、一部Ⅳ期までであることから、13世紀後半から14世紀中葉にかけての短期間に営まれた遺跡であると推定できる。遺跡は溝や井戸の新旧関係より大きく分けて下記の2時期に分類できる。

I期：S D01・04・10・02を区画溝とし、内部に掘立柱建物址 S B01・02、井戸 S E01～03・08などの施設を構築する。時期は13世紀後半から14世紀前葉。

II期：S D05を区画溝とし、S E05～07を構築する。時期は14世紀前葉～中葉。

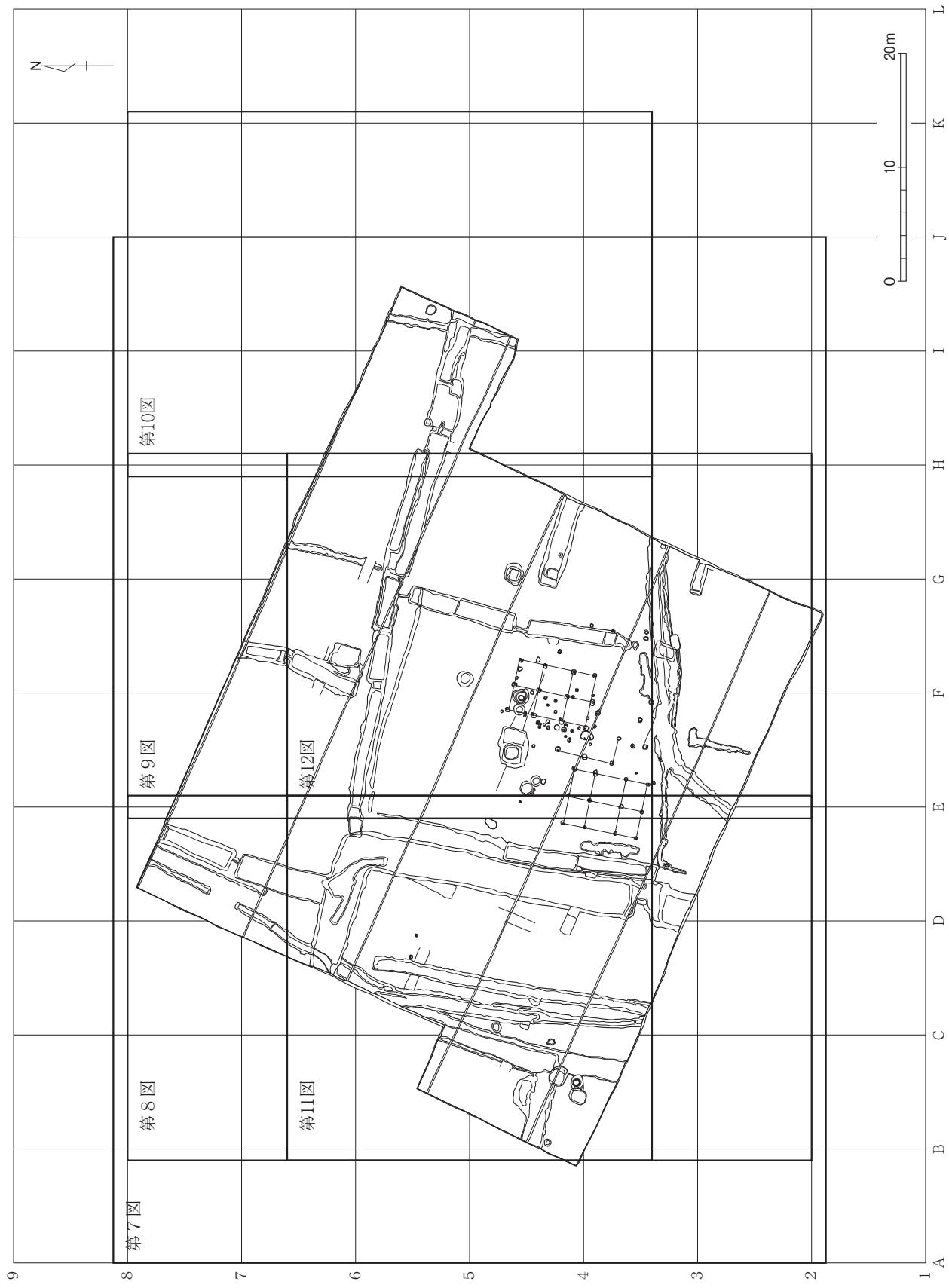
I期およびII期の区画溝は方位を同一としており、またS D01の先端とS D05の屈曲部が交わることなどから地割りとしては両時期とも共有する。

出土遺物は、土師器皿、珠洲擂鉢、青磁碗、漆器碗、箸などの食膳具や調理具を主体として出土している。特に土師器皿や青磁碗の食膳具の出土が多いことから開発領主的な性格をもつ人々が生活を営んでいた可能性がある。

13世紀後半は、放生津に守護所としての放生津城が築城され、特に神楽川流域が開発される時期である。地元の伝承としては、当遺跡周辺に三歩一城の存在が伝えられており、当遺跡周辺では他にもこうした開発領主的な集落址の存在が想定できる。

参考文献

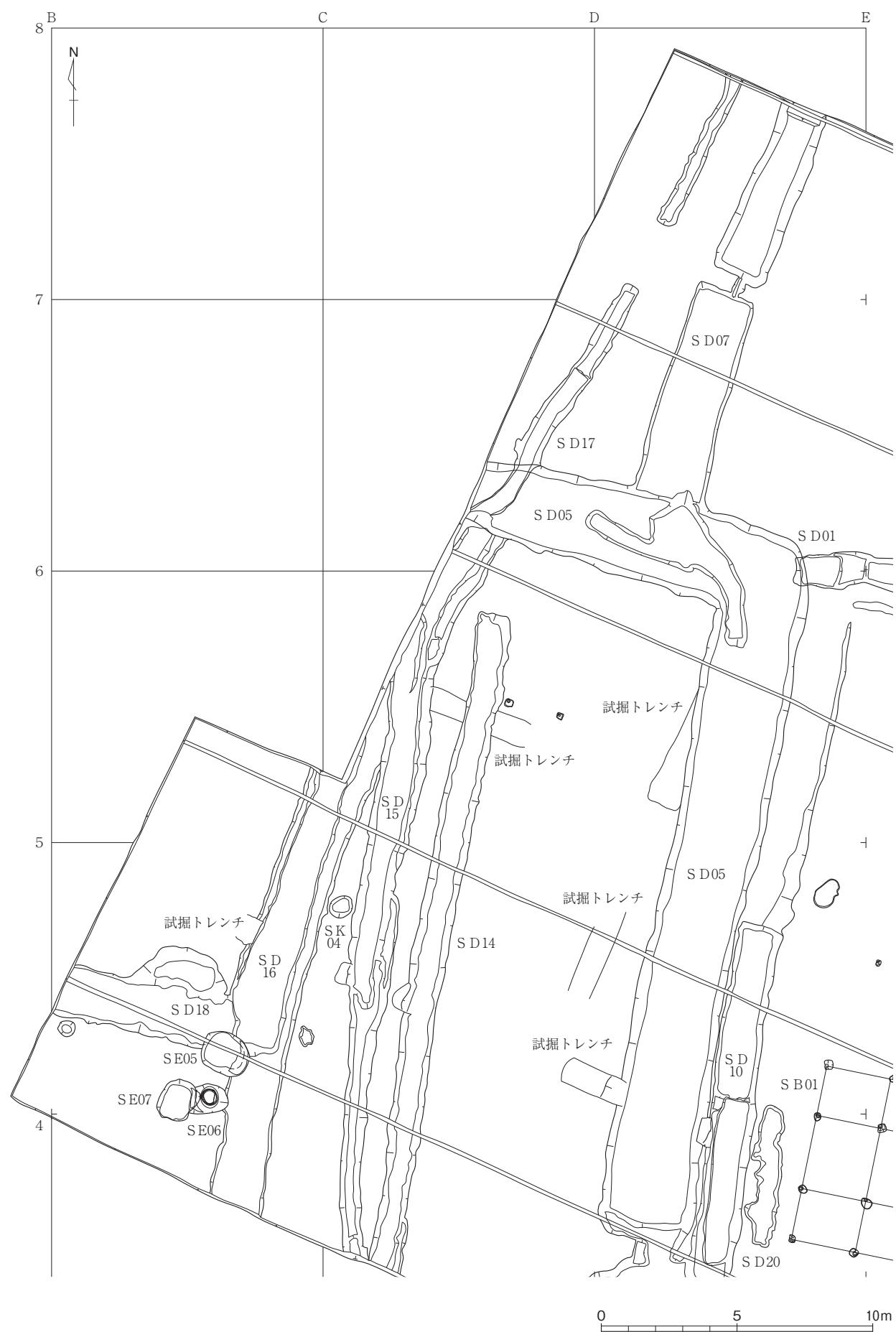
- 青木 一彦他 1996 「射水平野の遺跡－古代北陸道を探る－」『大境』第18号 富山考古学会
青木 一彦他 1997 「中世放生津について」『大境』第19号 富山考古学会
青山 裕子他 2013 『白石遺跡・大江東遺跡・大江遺跡・愛宕遺跡・今開発東遺跡・今開発遺跡・三ヶ・本開発遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
荒木 菊男他 1997 『しんみなどの歴史』 新湊市
安念 幹倫他 1995 『北高木遺跡発掘調査報告書』 大島町教育委員会
宇野 隆夫 1982 『井戸考』『史林』第65巻第5号 史学研究会
越前 慎子 1996 『梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年』『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
越前 慎子他 2012 『水上遺跡・赤井南遺跡・安吉遺跡・棚田遺跡・本江大坪I遺跡発掘調査報告』富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
尾野寺克実 1999 『安吉遺跡発掘調査報告』 大門町教育委員会
尾野寺克実他 2005 『安吉遺跡発掘調査報告（3）』 大門町教育委員会
金三津英則他 2008 「中世放生津の都市構造と変遷」『基盤研究（B）研究成果報告書 港湾をともなう守護所・戦国期城下町の総合的研究－北陸を中心に－』（代表；仁木 宏、課題番号；1732003）
久々 忠義 1991 『荒畠遺跡発掘調査概要』 大島町教育委員会
久々 忠義他 1994 「射水平野の遺跡－神楽川流域を探る－」『大境』第16号 富山考古学会
宗 融子 1998 『新湊市埋蔵文化財分布調査報告I』 新湊市教育委員会
高瀬 重雄他 1994 『富山県の地名』 平凡社
田中 明 2005 『北高木遺跡』 大島町教育委員会
近岡七四郎他 1964 『新湊市史』 新湊市役所
吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館



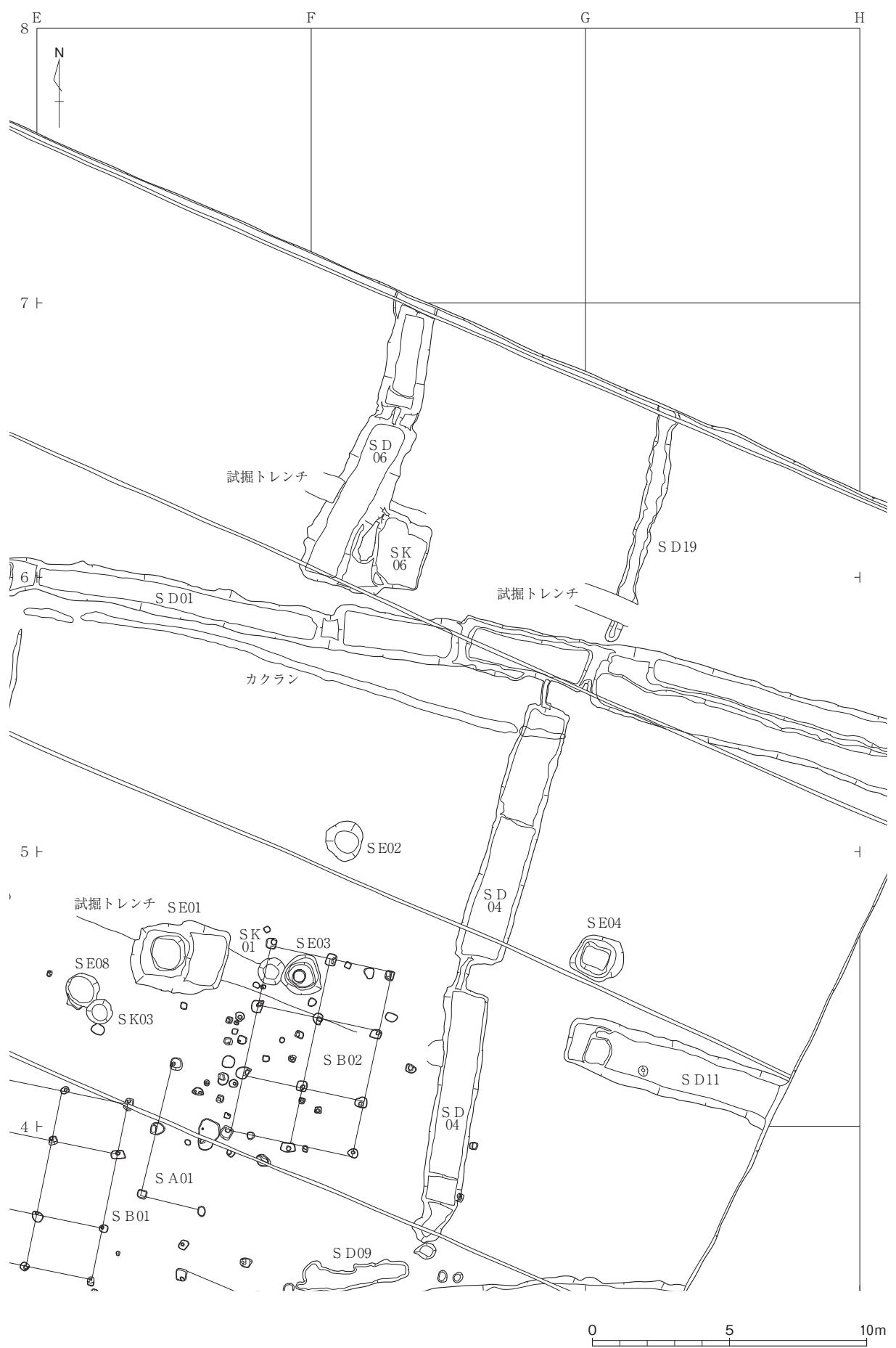
第7図 図面配置図 (1/500)



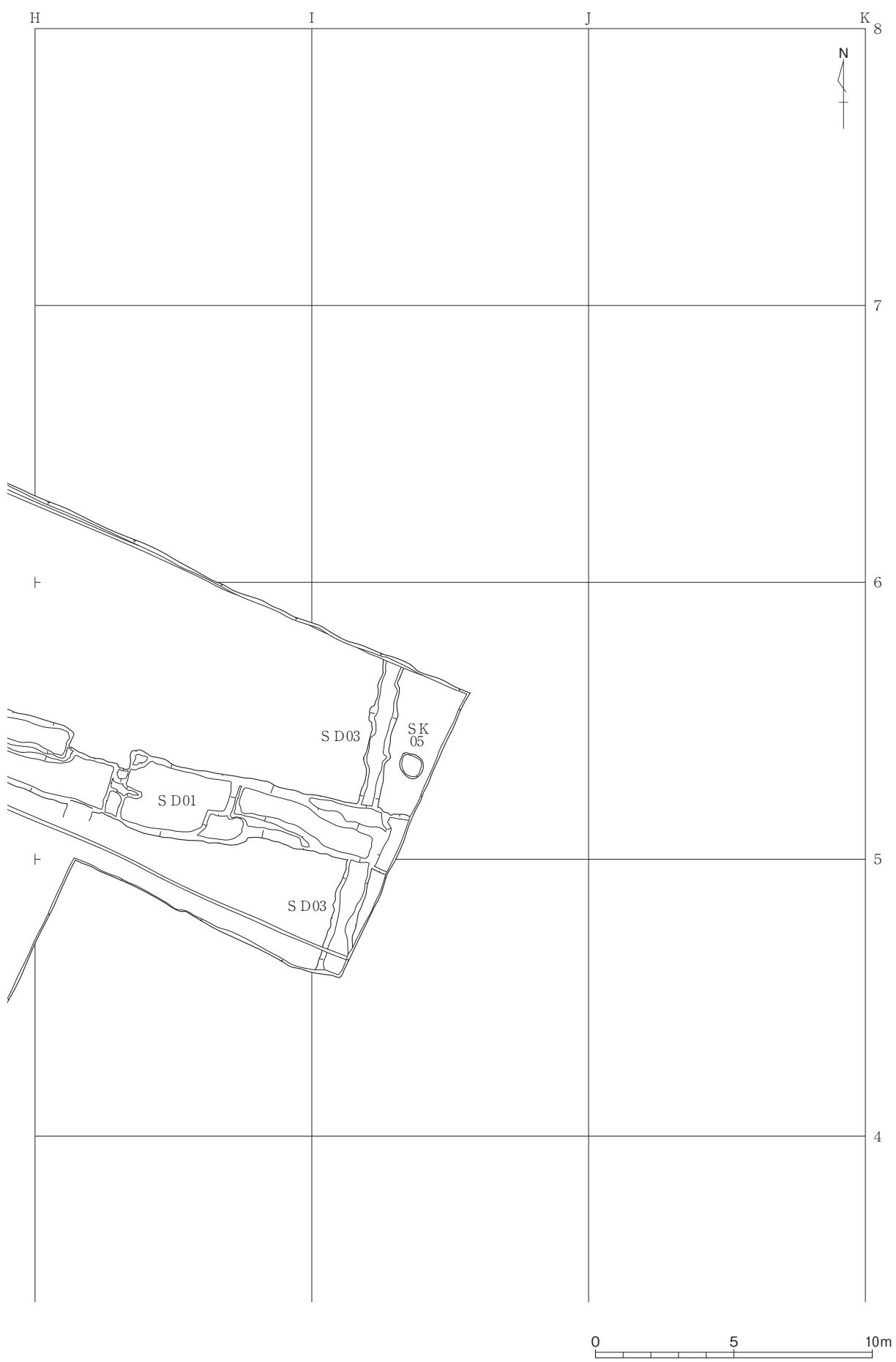
第8図 調査地区全体図 (1/400)



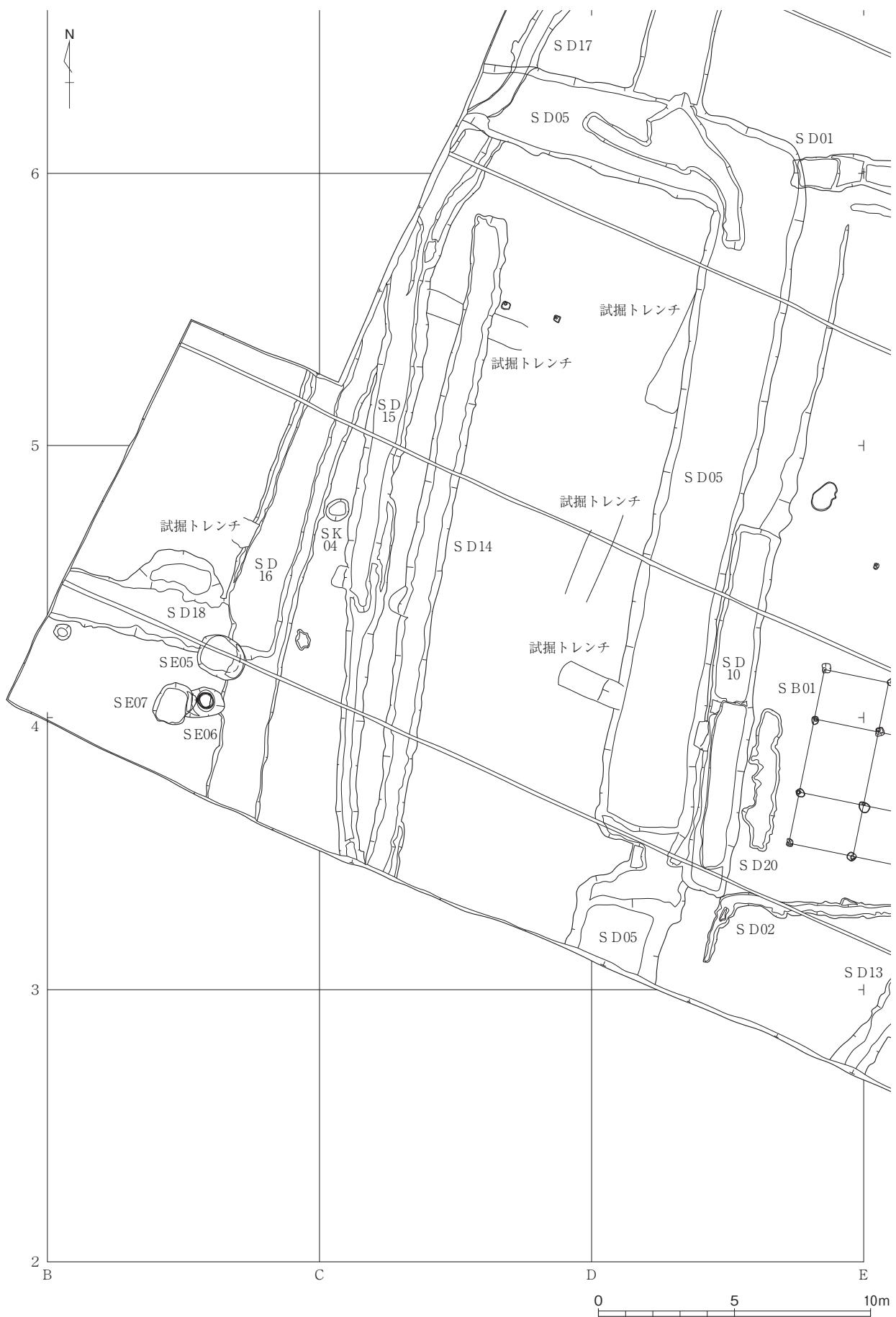
第9図 遺構平面図 [1] (1/200)



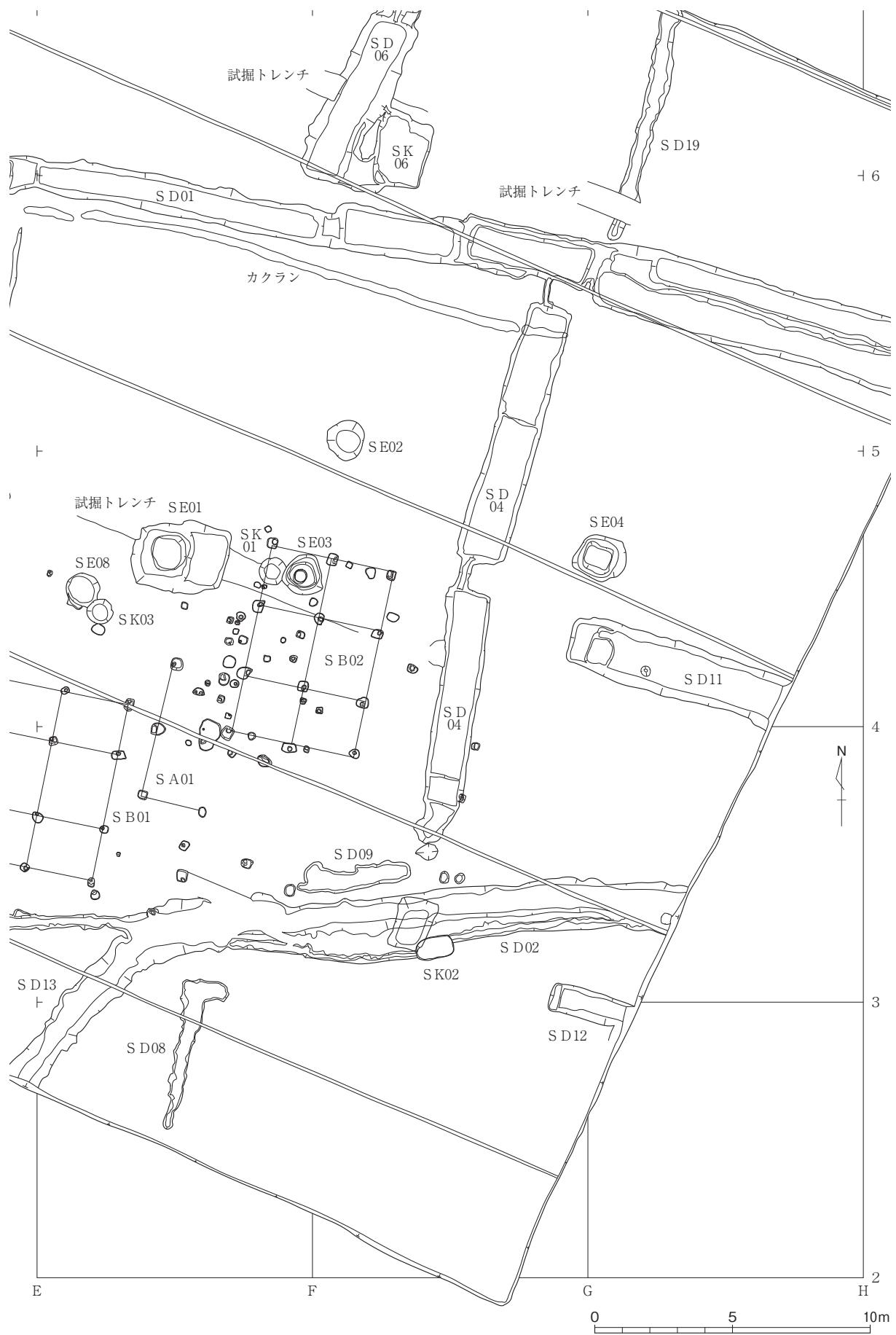
第10図 遺構平面図 [2] (1/200)



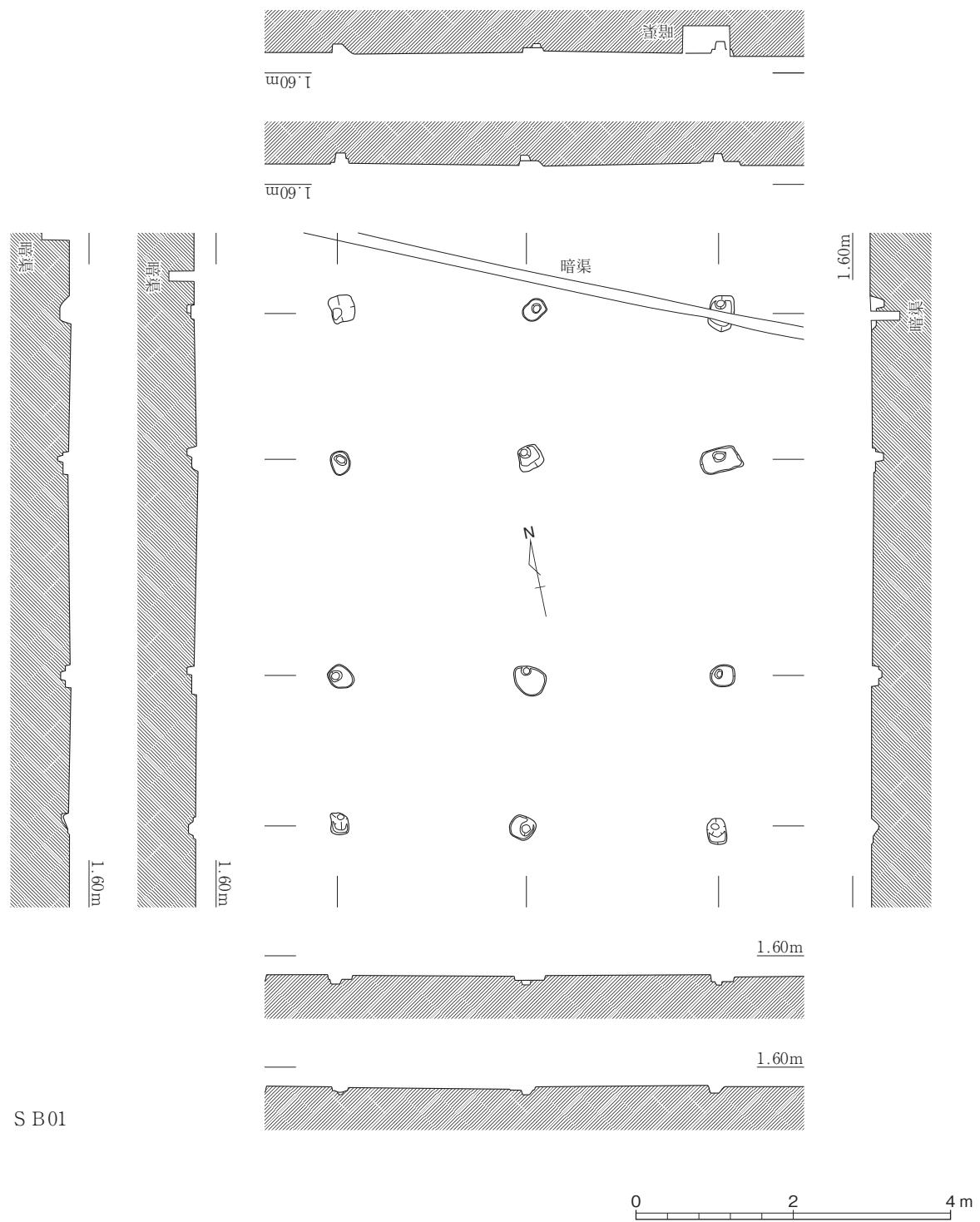
第11図 遺構平面図〔3〕 (1/200)



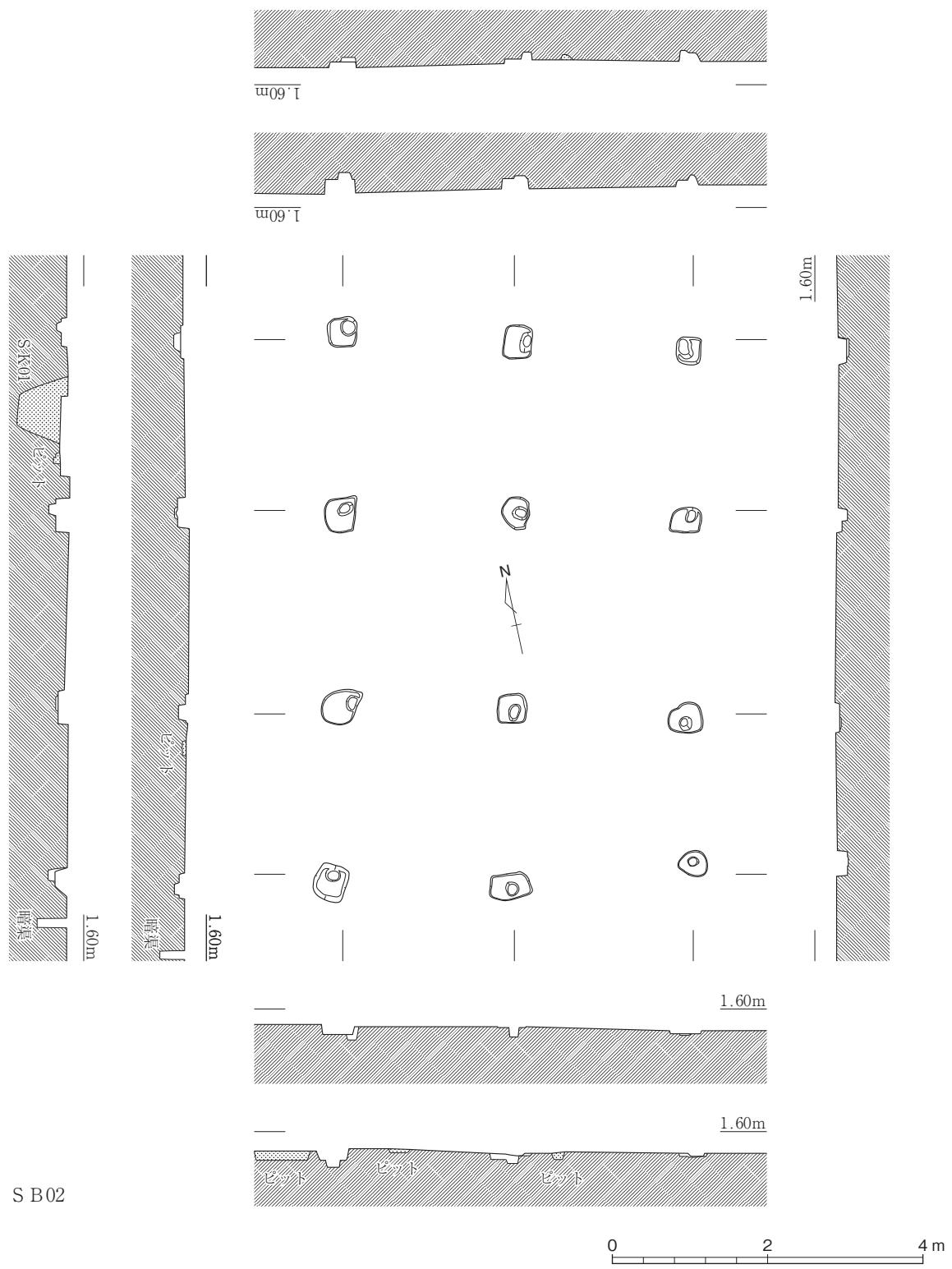
第12図 遺構平面図 [4] (1/200)



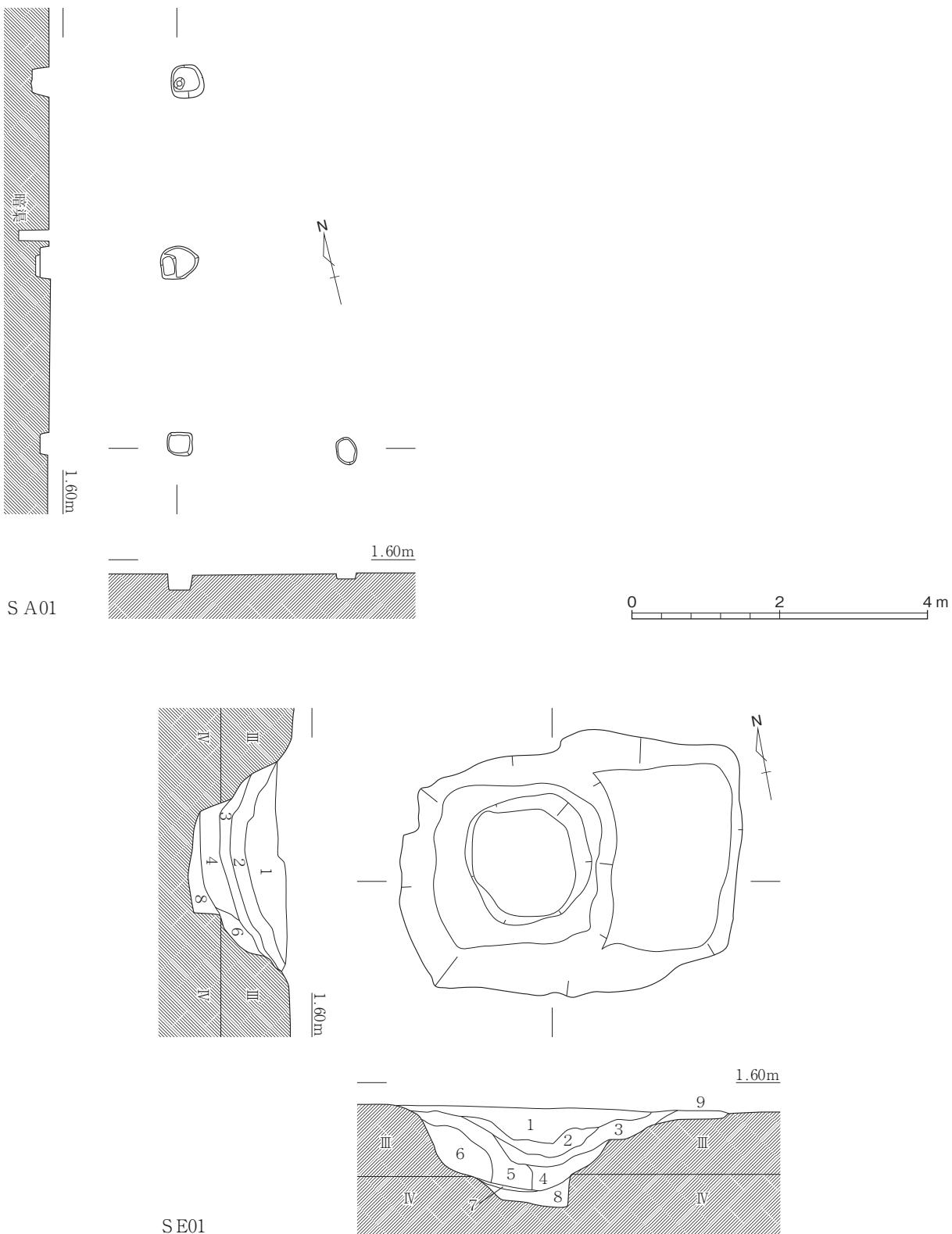
第13図 遺構平面図 [5] (1/200)



第14図 S B 01実測図 (1/80)

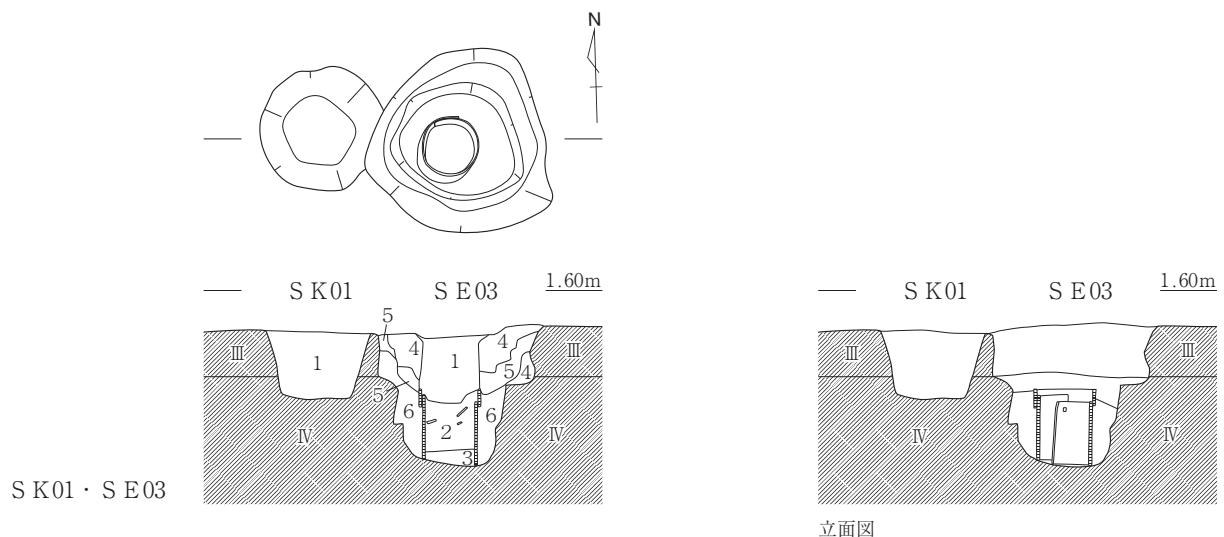


第15図 S B 02実測図 (1/80)



- | | | | |
|----------------------|----------------|----------------------|----------------|
| 1 10YR2/1 黒色粘土質シルト | III層ブロック 10%含む | 6 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト | III層ブロック 2 %含む |
| 2 10YR2/1 黒色粘土質シルト | | 7 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト | 腐植物を多量に含む |
| 3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト | | 8 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト | |
| 4 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト | 3層を 2 %含む | 9 IV層に黒色シルト 5 %含む | |
| 5 10YR3/2 黒褐色細粒砂質シルト | III層ブロック 5 %含む | | |

第16図 S A01・S E01実測図 (1/80・1/60)



S K01

1 10YR2/2 黒褐色細粒砂質シルト Ⅲ層ブロック 2 %含む

S E03

1 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト

2 10YR6/1 褐灰色粘土質シルト Ⅲ層ブロック 20%含む

3 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト

4 10YR7/6 明黄褐色粘土質シルト 黒褐色シルトブロック状 30%含む

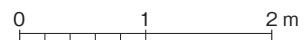
5 10YR4/4 褐色粘土質シルト 褐灰色シルト 2%含む

6 10YR5/1 褐灰色粘土質シルト

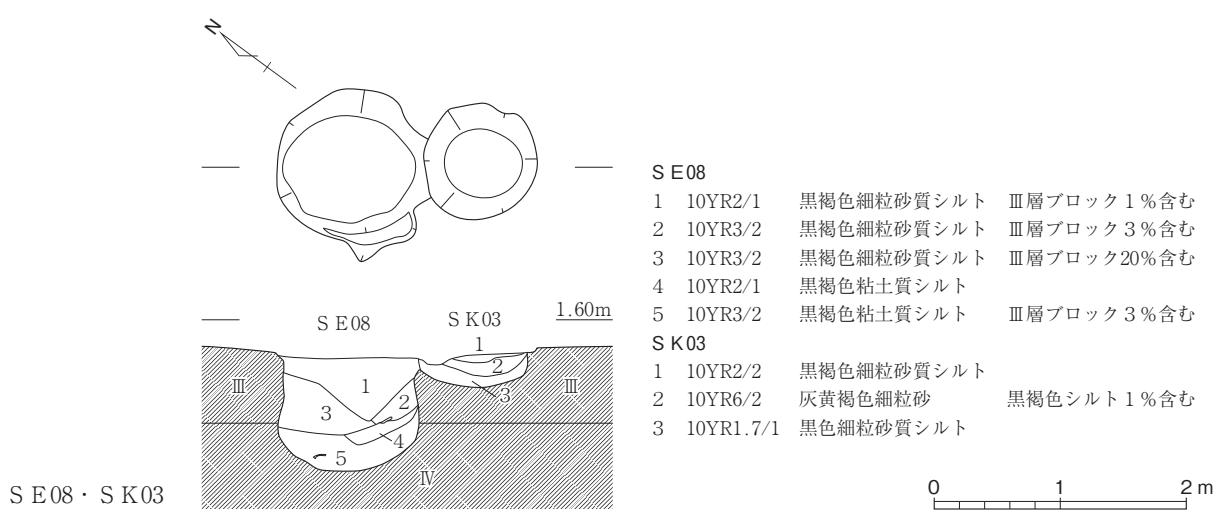
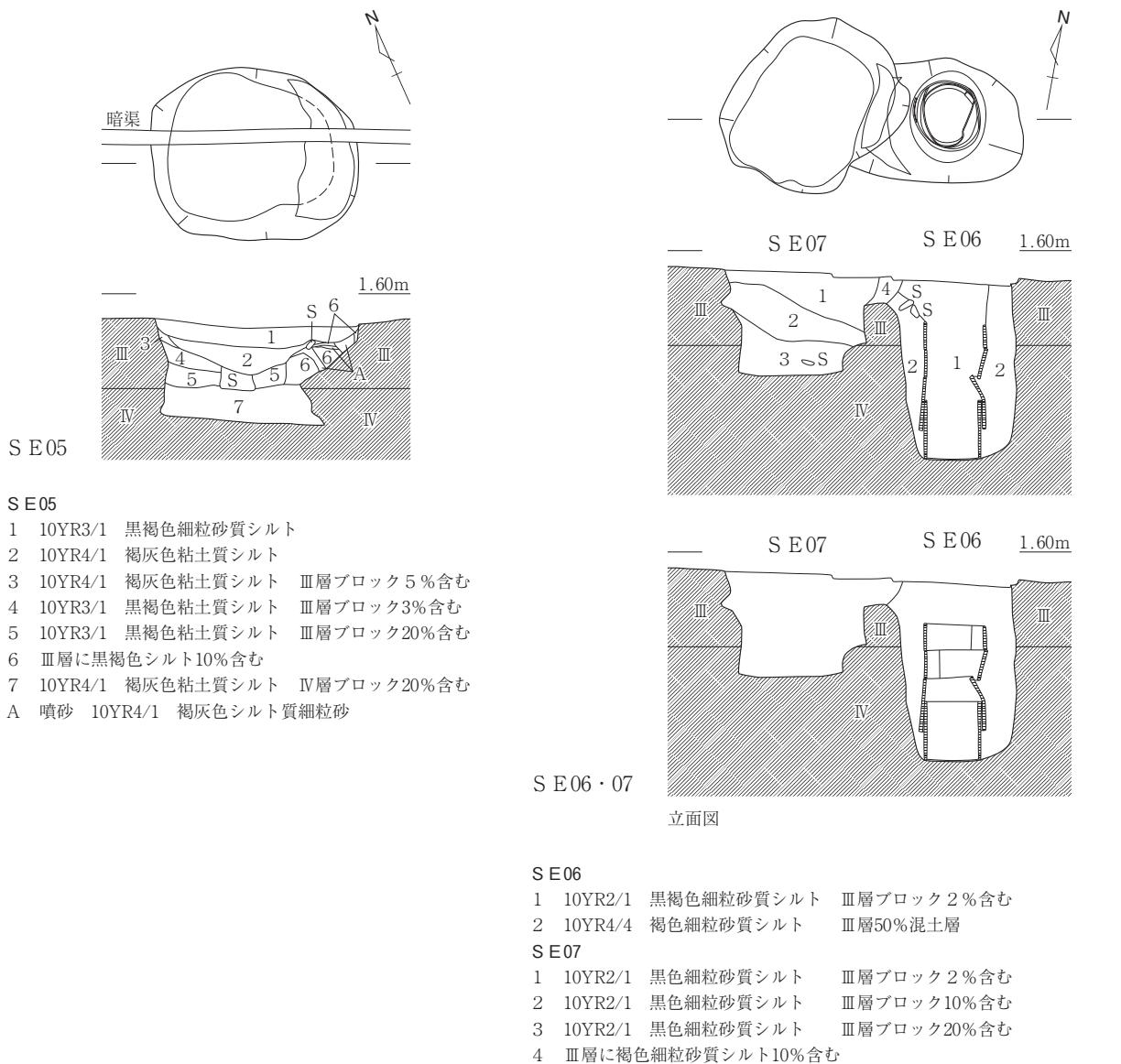
立面図

1 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト Ⅲ層ブロック 3 %含む
2 10YR4/1 褐灰色粘土質シルト
3 10YR1.7/1 黑色粘土 Ⅲ層ブロック 2%含む

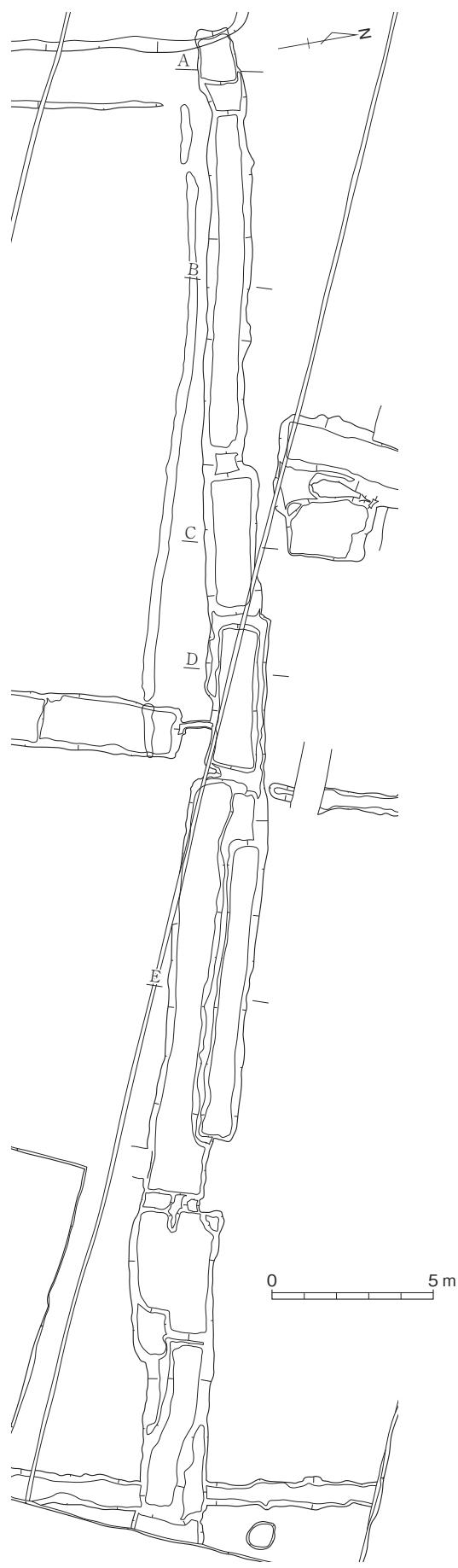
1 10YR7/1 黑色粘土質シルト
2 10YR2/2 黑褐色粘土 Ⅲ層 2 %含む
3 10YR7/1 黑色粘土質シルト
4 10YR4/1 褐灰色粘土 5 層 2 %含む
5 10YR2/1 黑色粘土



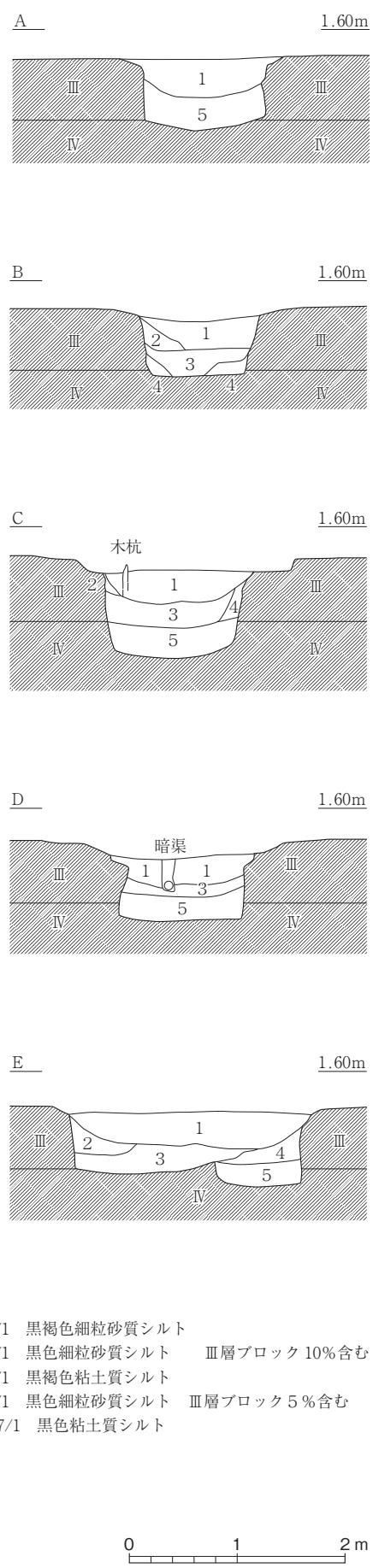
第17図 S E02~04、S K01実測図 (1 / 60)



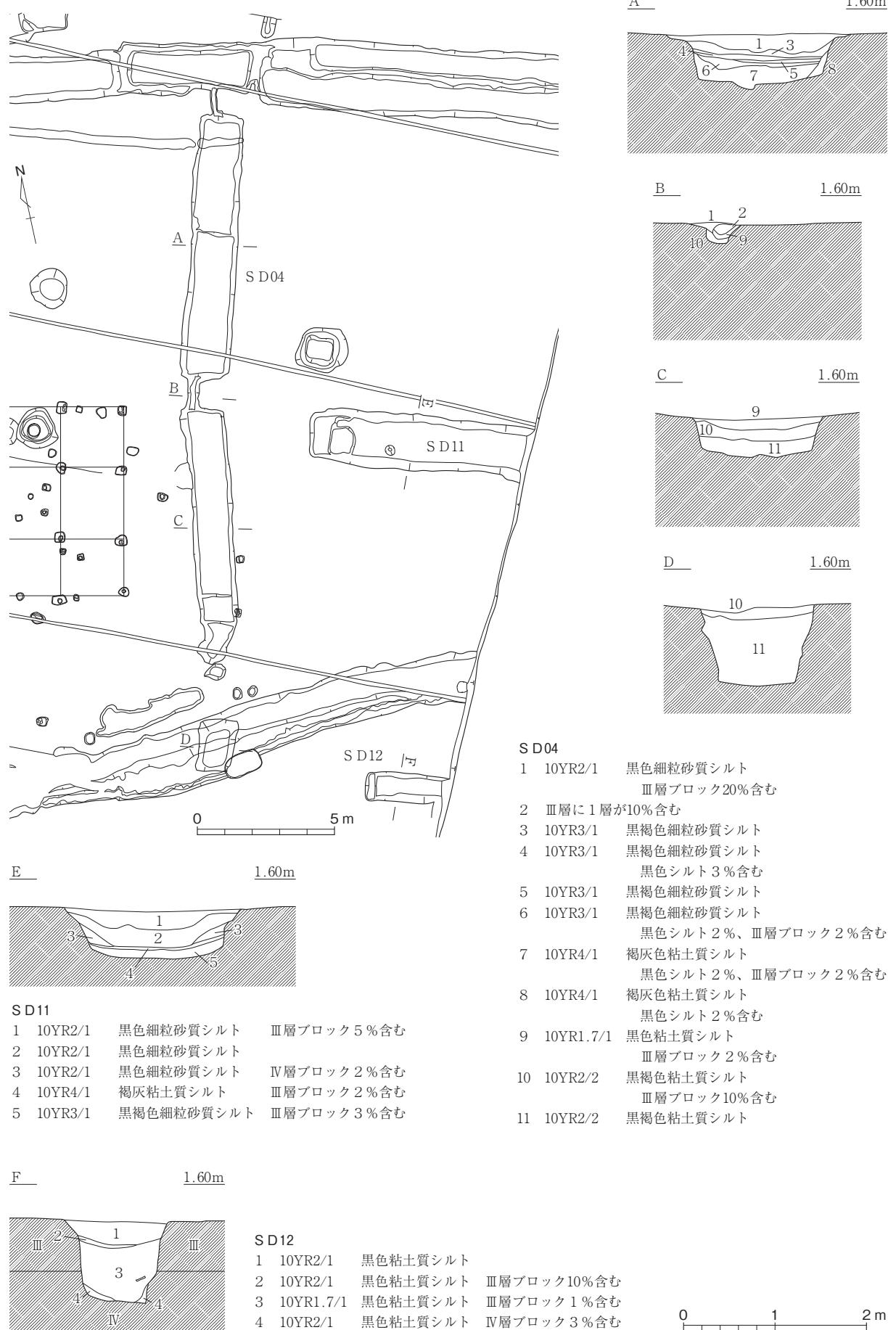
第18図 S E05~07、SK03実測図 (1/60)



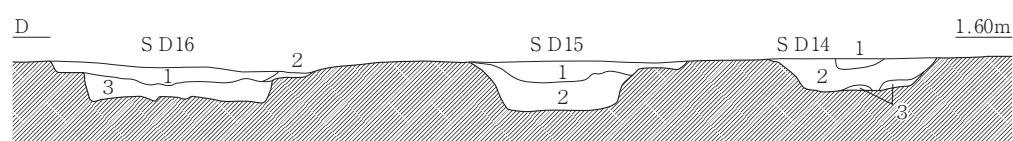
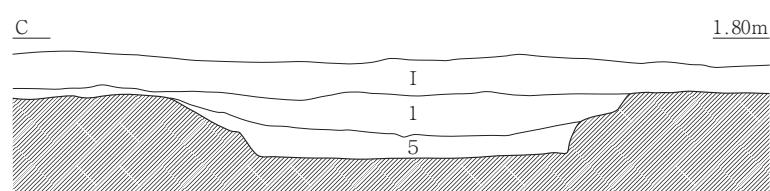
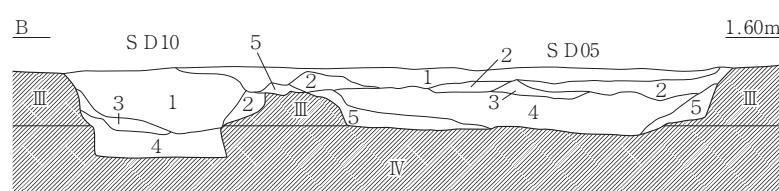
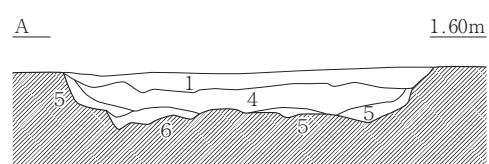
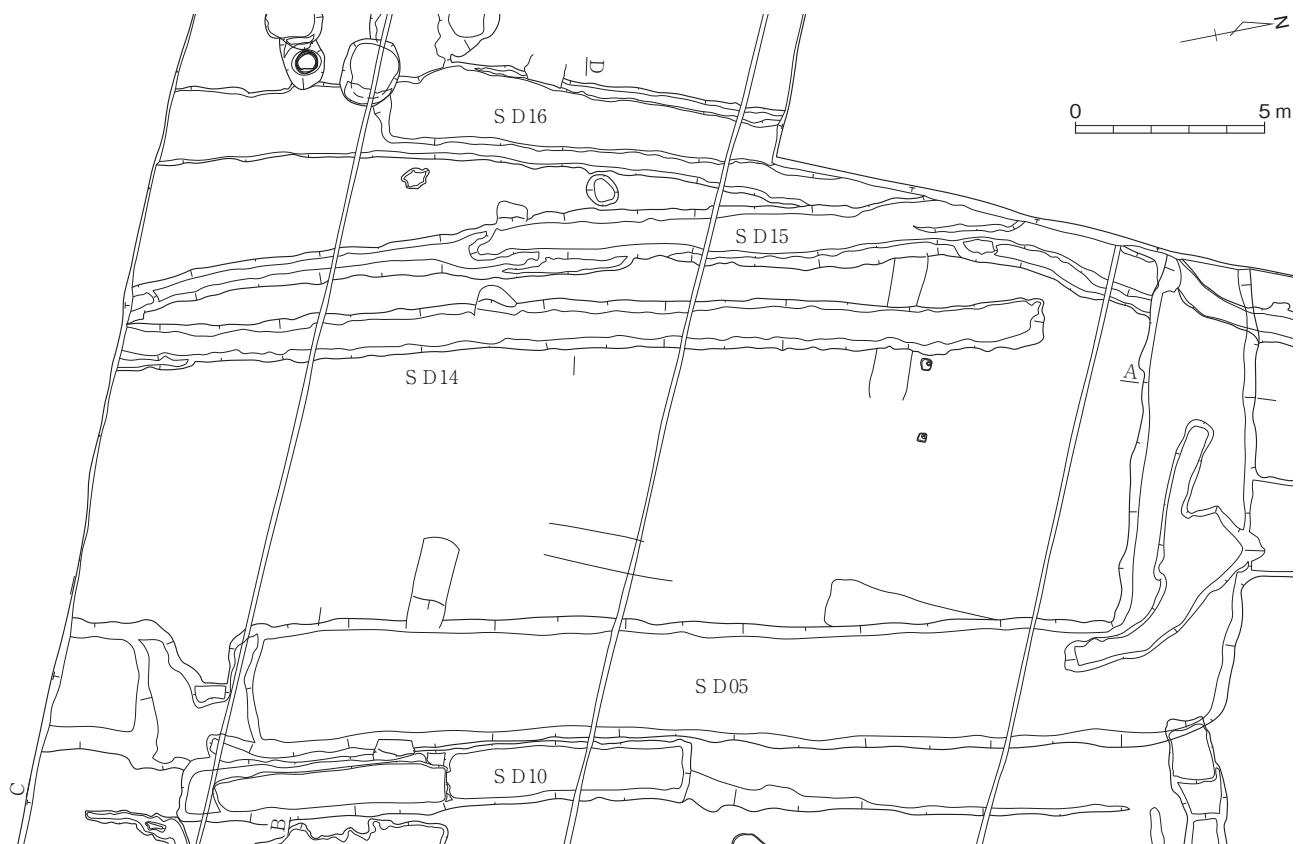
第19図 S D01実測図 (1/200・1/60)



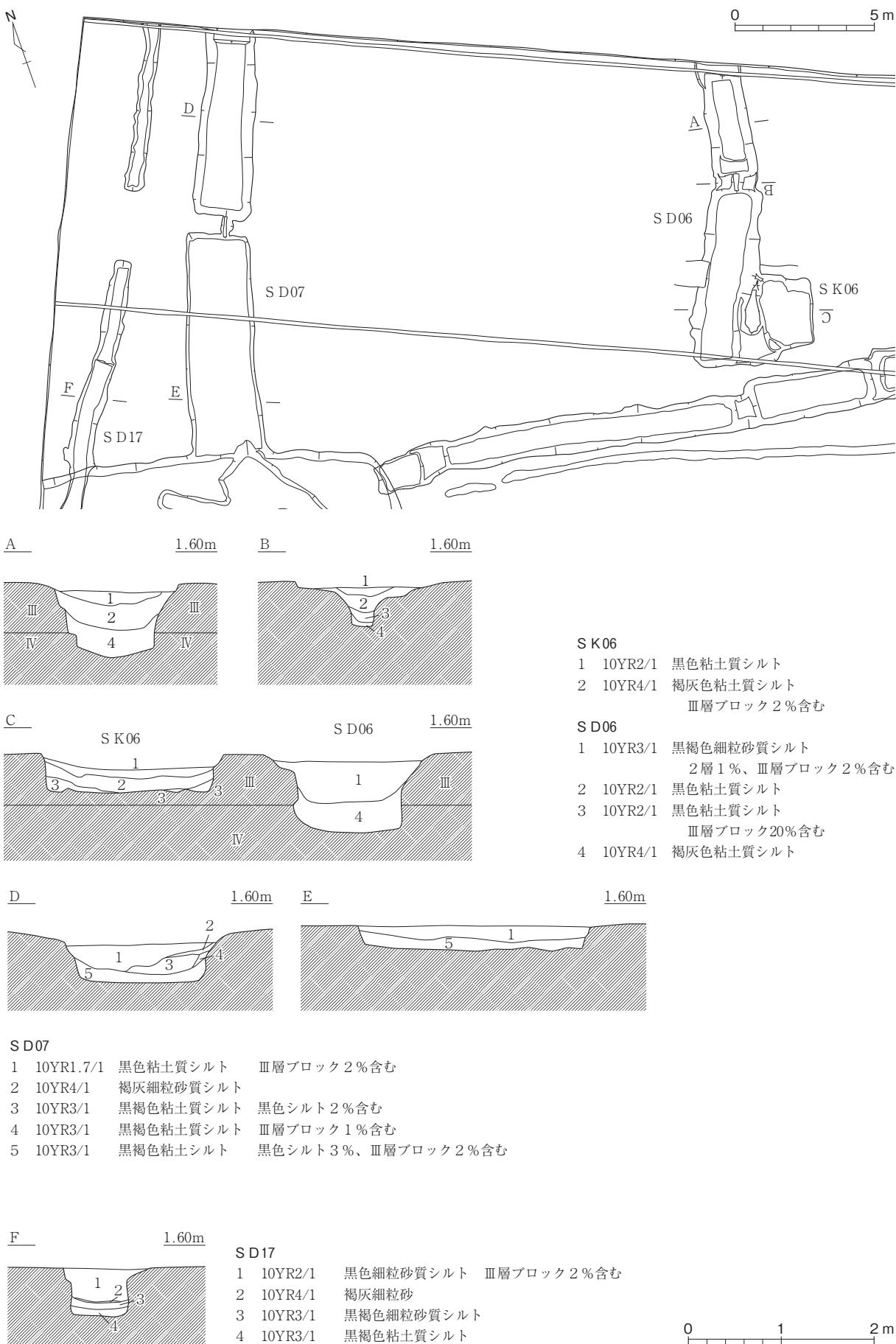
- 1 10YR3/1 黒褐色細粒砂質シルト
- 2 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト III層ブロック 10%含む
- 3 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト
- 4 10YR2/1 黒色細粒砂質シルト III層ブロック 5%含む
- 5 10YR1.7/1 黒色粘土質シルト



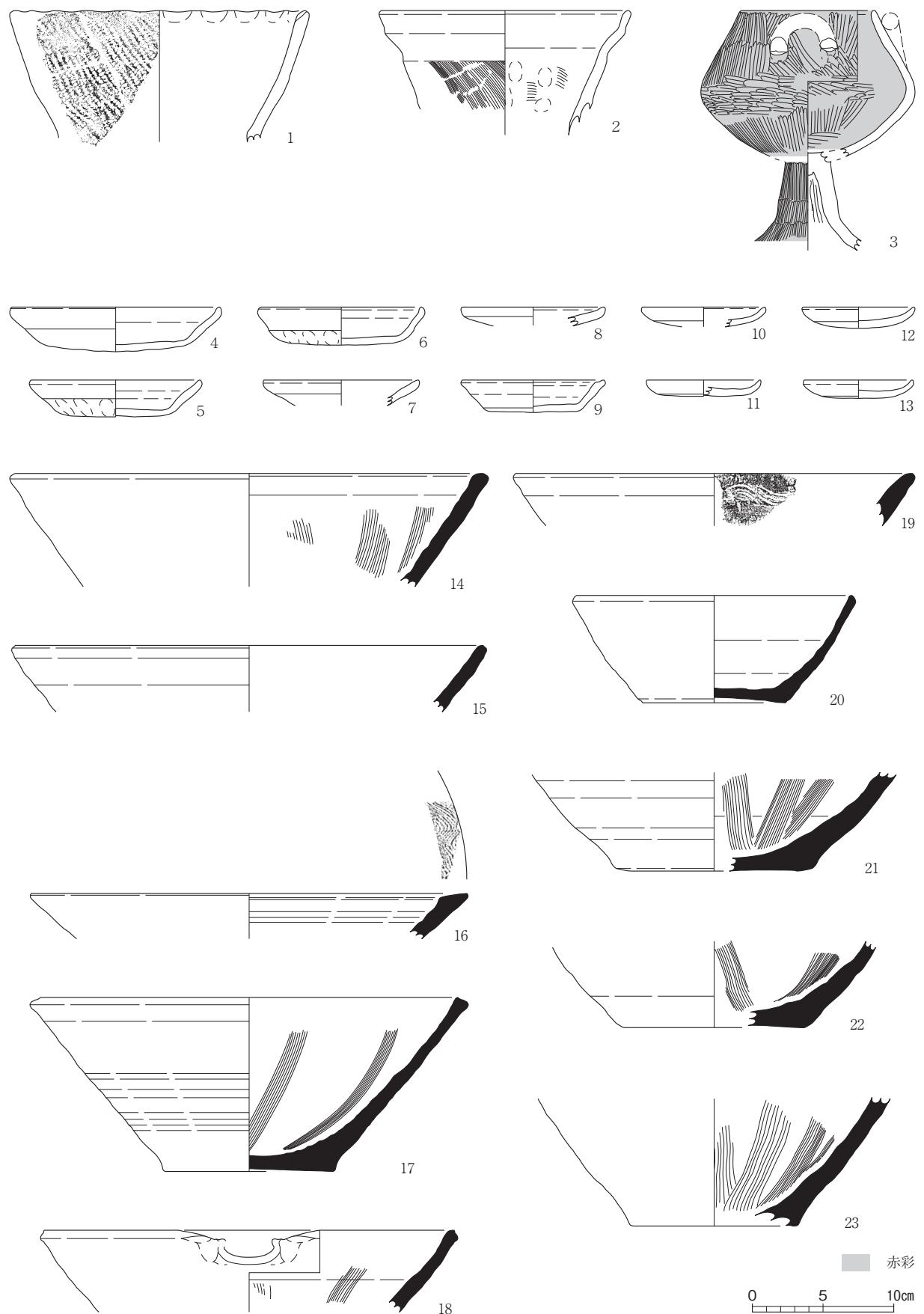
第20図 S D04・11・12実測図 (1/200・1/60)



第21図 SD 05・10・14~16実測図 (1/200・1/60)

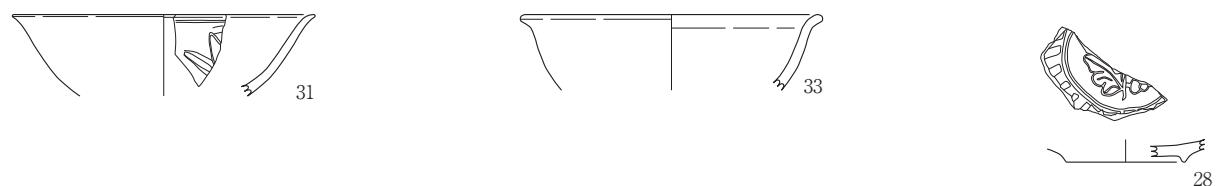
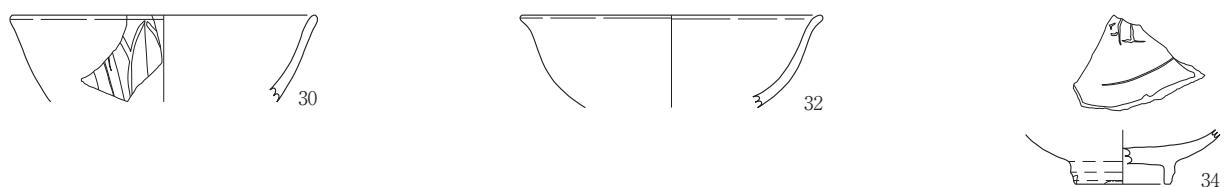
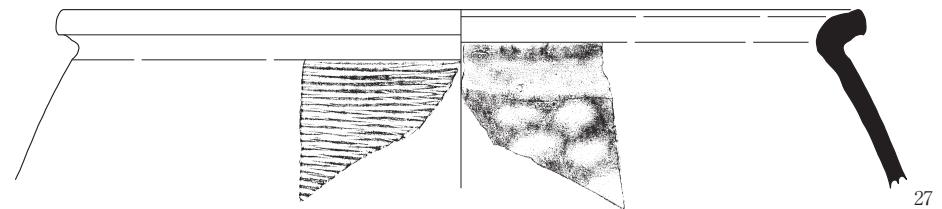
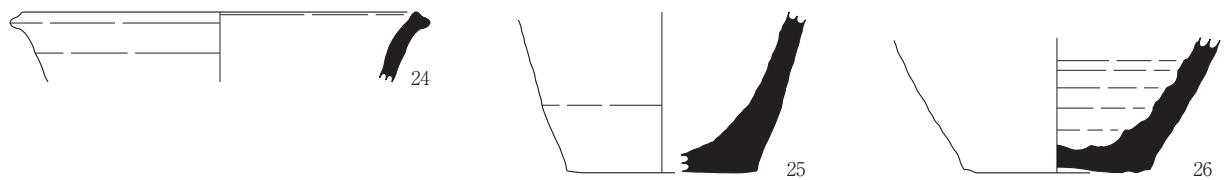


第22図 S D06・07・17、S K06実測図 (1/200・1/60)



第23図 遺物実測図 [1] (1/4)

S E01 (5)、S E07 (15)、S K03 (17)、S D01 (23)、S D04 (3・4・6・8・10～13・17・20)、S D05 (14)
S D06 (1・2)、S D14 (9)、S D15 (18・21)、S D17 (17)、表土 (7・16・19)

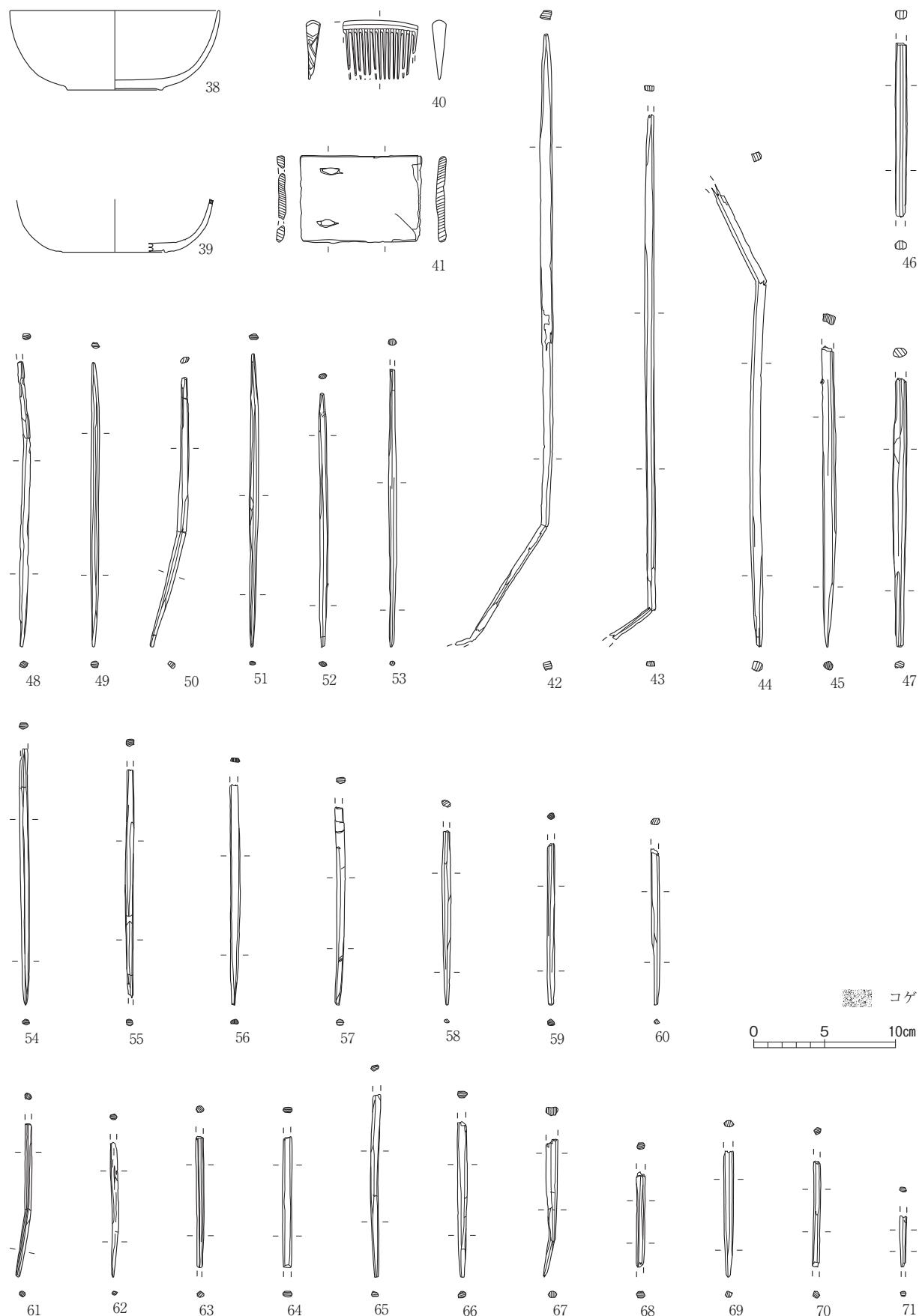


0 5 10cm

第24図 遺物実測図〔2〕(実大・1/4)

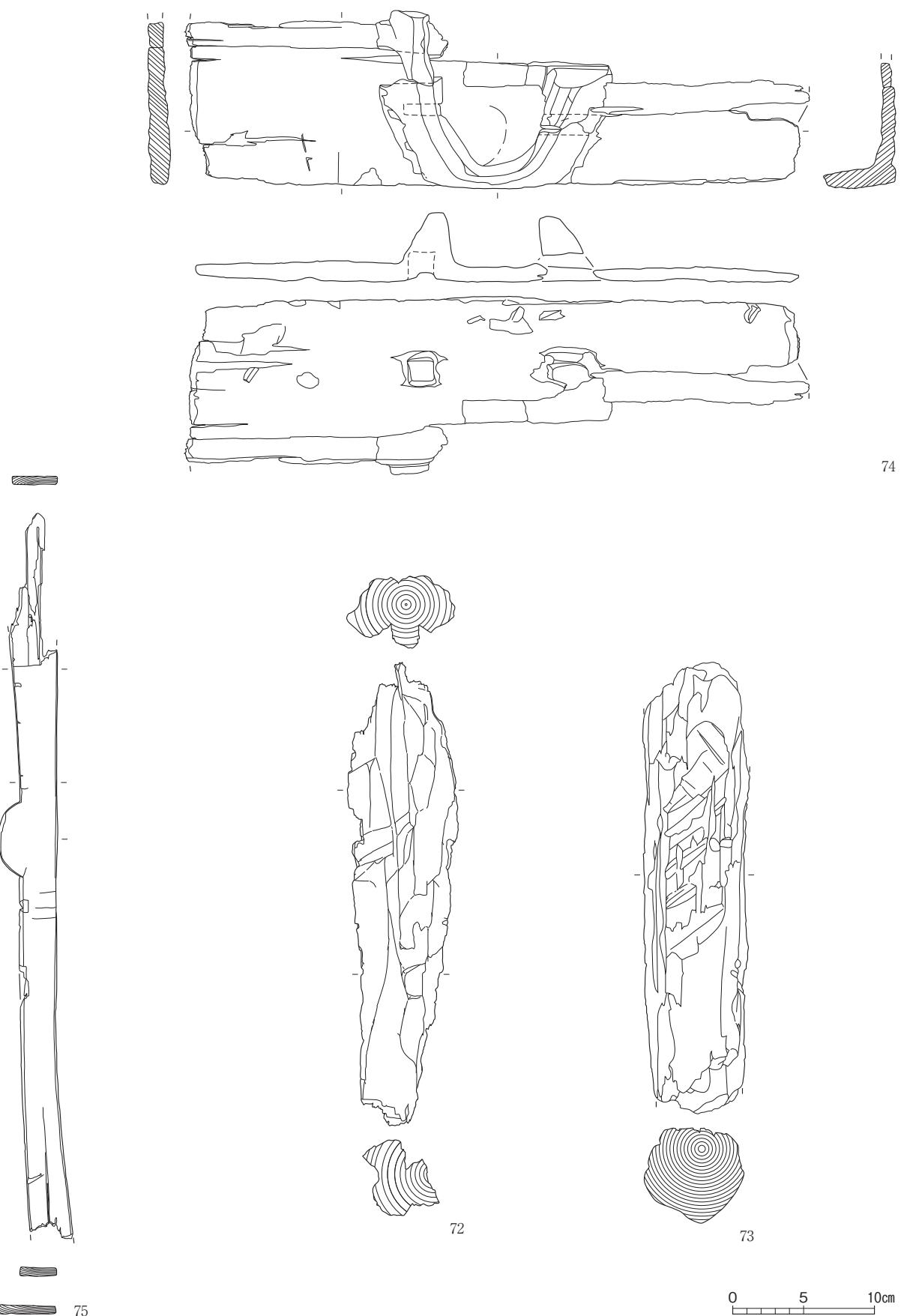
S E 05 (36)、S E 06 (27)、S D 04 (24・30)、S D 05 (31・32)、S D 15 (25・26)、表土 (28・29・33~35・37)

0 5 cm



第25図 遺物実測図 [3] (1/4)

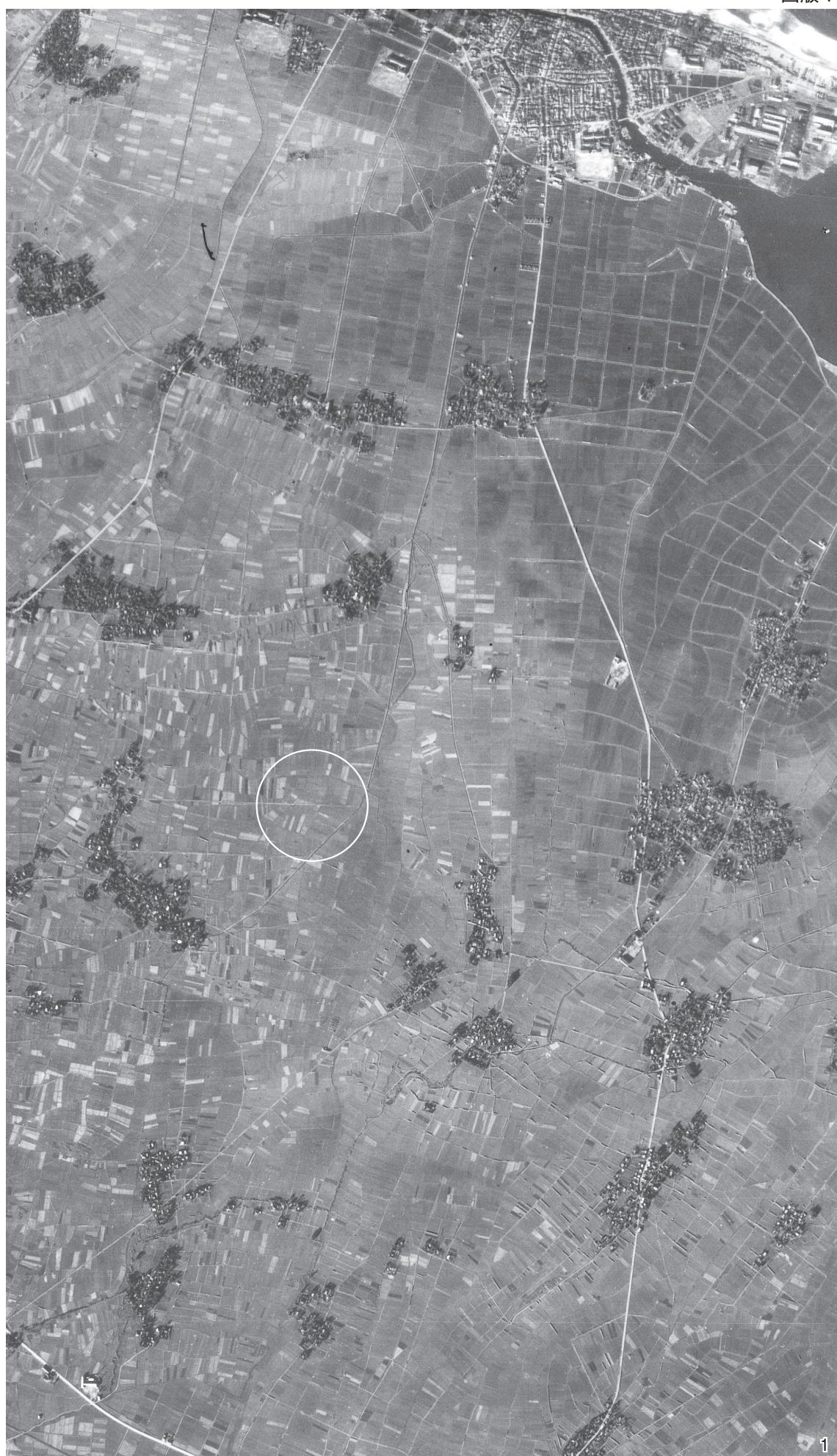
S E01 (40~45・49・53・56・65~68)、S E02 (69)、S E04 (51)、S E08 (39・46・47・50・54・55・57~64・70・71)
S D01 (48)、S D04 (38)



第26図 遺物実測図 [4] (1/4)

S E01 (75) 、 S D05 (72・73) 、 S D11 (74)

1. 米軍撮影空中写真
(1947年撮影)



図版2



1. 全景（北東から）



2. 全景（南東から）

1. 全景（南西から）



1

2. 全景（北西から）



2

図版4

1. 全景（北から）



1

2. 全景（上方から）



2

1. 調査区中央部全景
(南から)



2. SB01・02全景
(北から)



図版6



1. SB01全景
(北から)



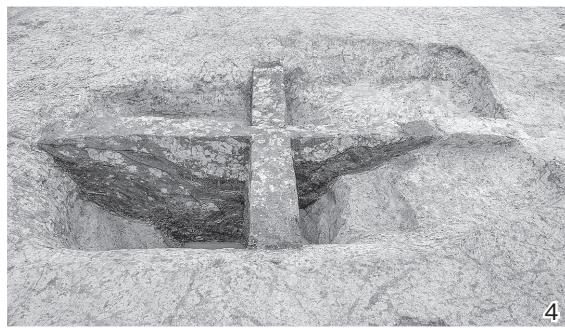
2. SB02全景
(北から)

図版7

1. S E01検出状況
(北から)
2. S E01全景
(北から)



3. S E01土層
(西から)
4. S E01土層
(南から)



5. S E02全景
(東から)
6. S E02土層
(東から)



7. S E03検出状況
(南から)
8. S E03全景
(南から)



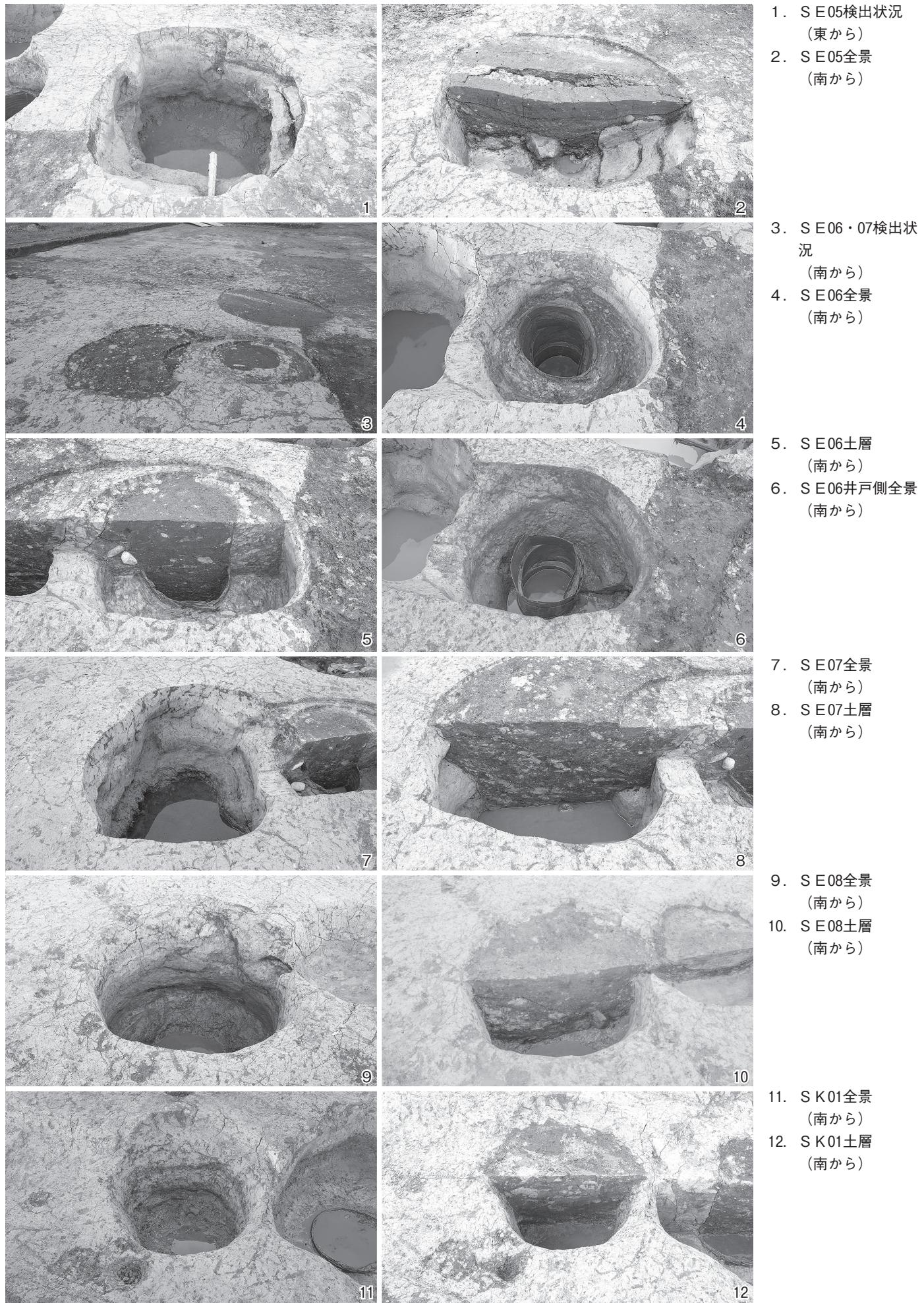
9. S E03土層
(南から)
10. S E03完掘
(南から)



11. S E04全景
(東から)
12. S E04土層
(東から)



図版8

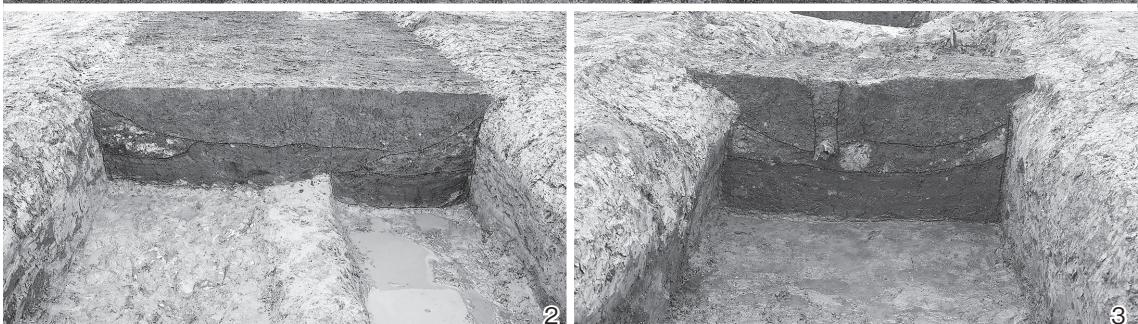


図版9

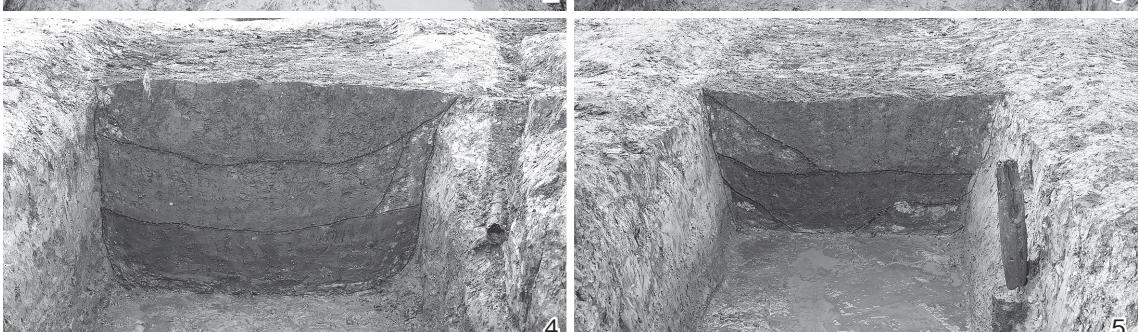
1. S D01全景
(東から)



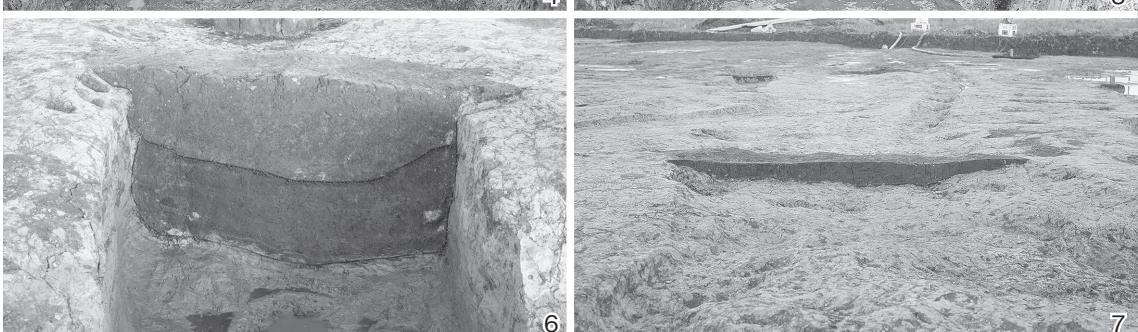
2. S D01東側土層
(東から)
3. S D01中央部土層
(東から)



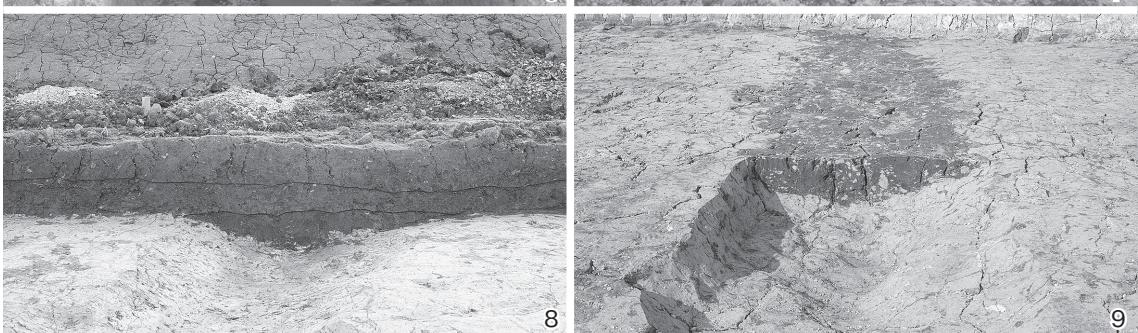
4. S D01中央部土層
(東から)
5. S D01西側土層
(東から)



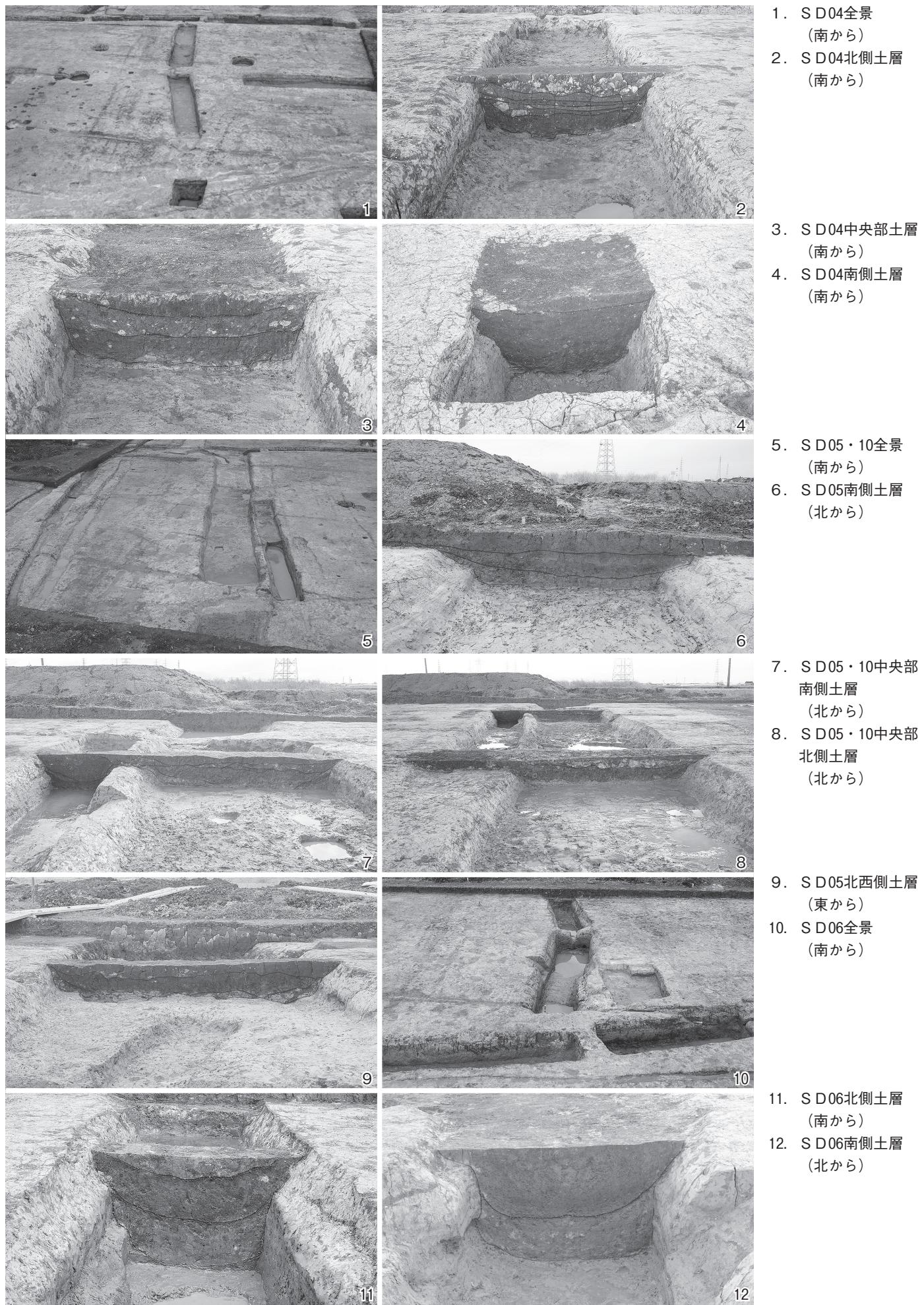
6. S D01西側土層
(西から)
7. S D02・13土層
(南から)



11. S D13土層
(北から)
12. S D03土層
(南から)



図版10



図版11

1. S D07全景
(北から)
2. S D07北側土層
(南から)



3. S D11全景
(北東から)
4. S D11土層
(東から)



5. S D12全景
(西から)
6. S D12土層
(西から)



7. S D14~18全景
(南から)
8. S D14土層
(南から)



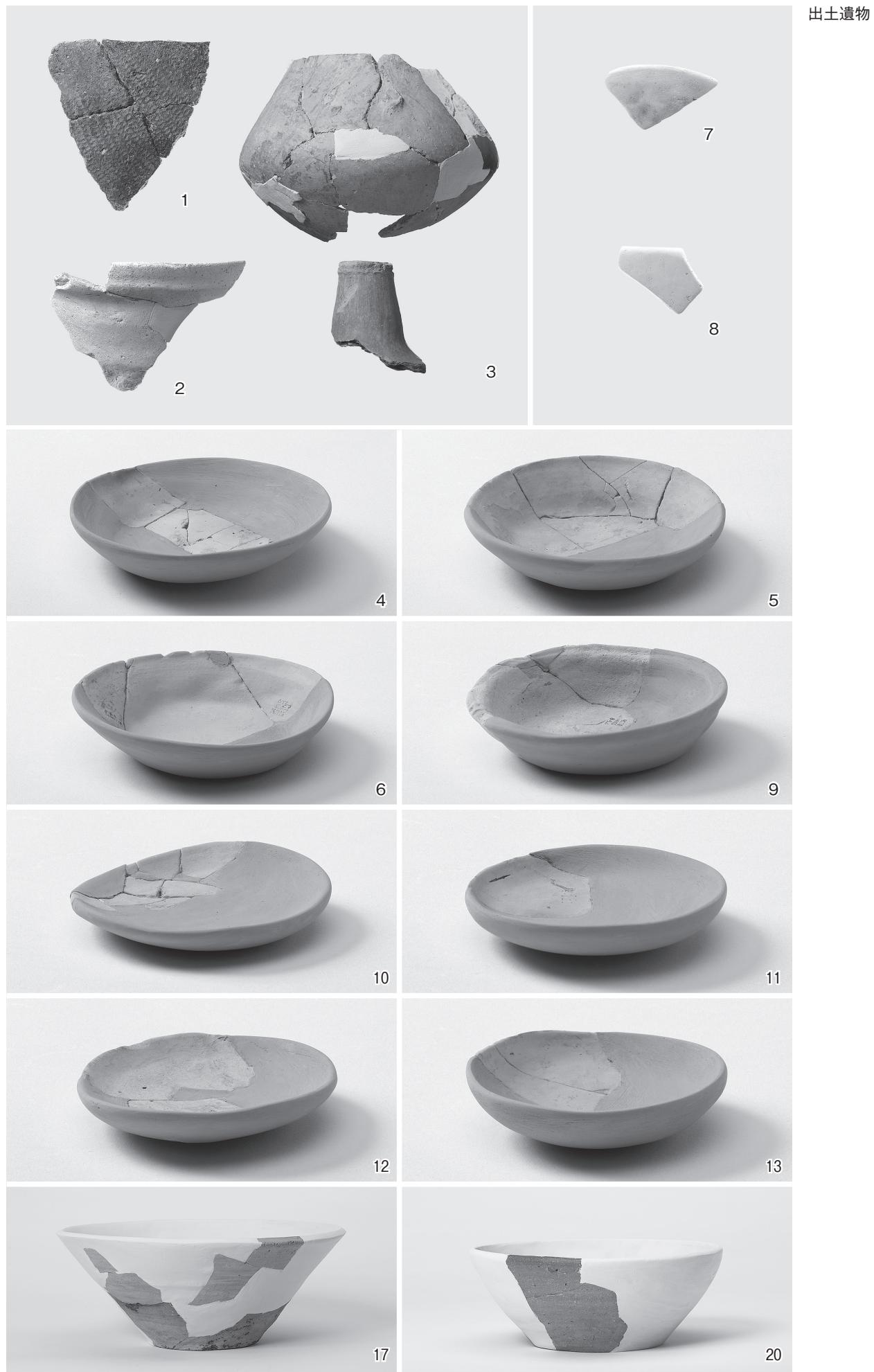
9. S D15土層
(南から)
10. S D16土層
(南から)



11. S D18全景
(西から)
12. S D18土層
(東から)

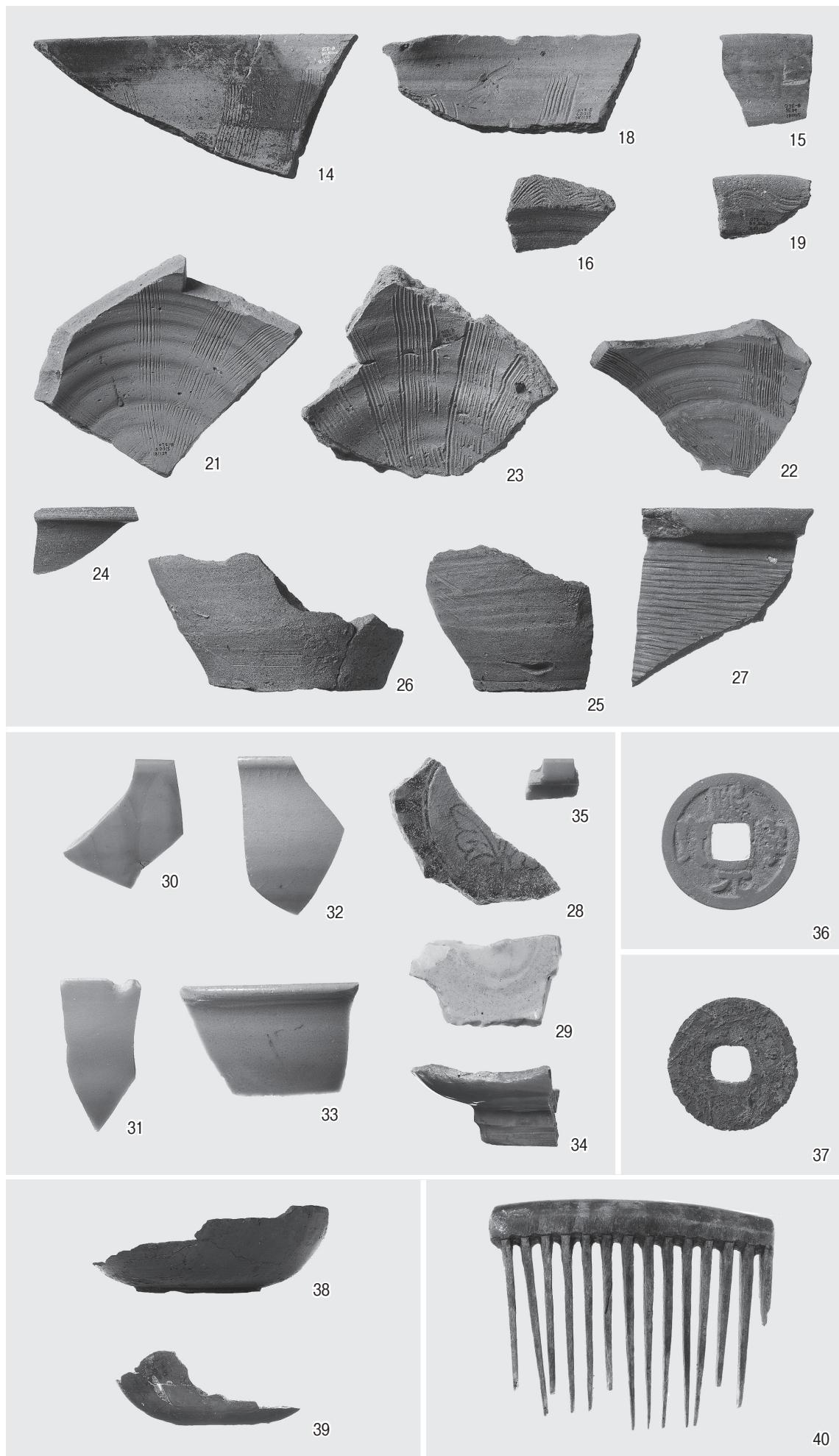


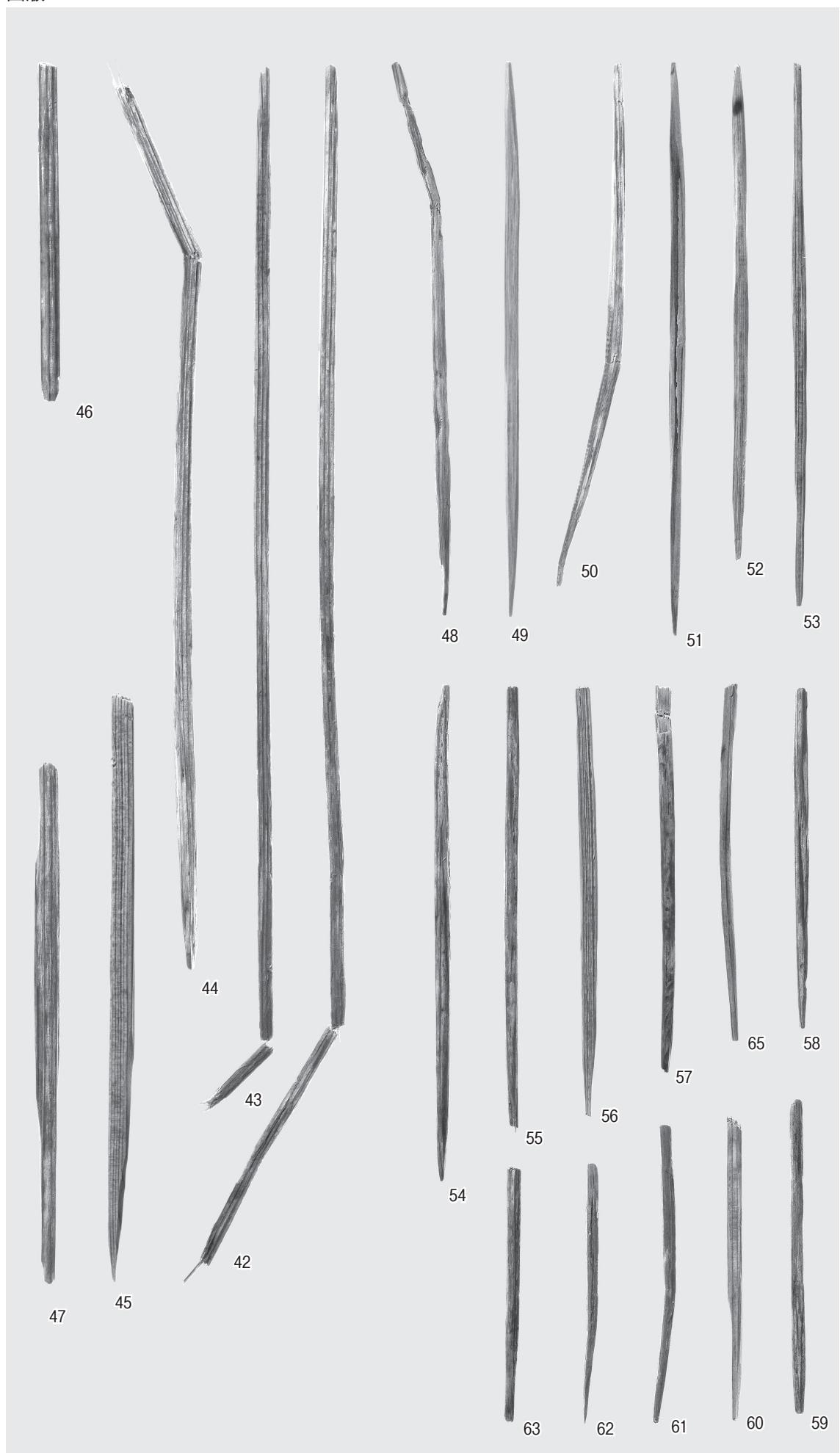
図版12



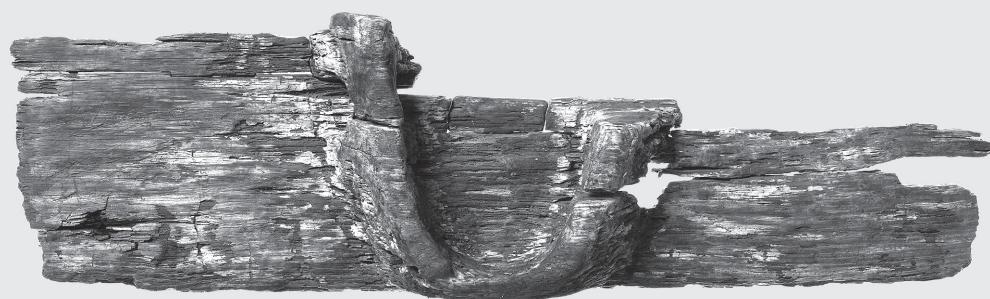
図版13

出土遺物





出土遺物



74



76



77



78



79



80

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おきつかはらひがしBいせきはつくつちょうさほうこく							
書 名	沖塚原東B遺跡発掘調査報告							
副 書 名	射水市斎場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
卷 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編 著 者 名	岡田一広、金三津英則							
編 集 機 関	株式会社エイ・テック							
所 在 地	〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク12番地							
発 行 機 関	射水市教育委員会							
所 在 地	〒939-0294 富山県射水市新開発410番地1							
発行年月日	西暦 2019年3月15日							
ふりがな 所 収 遺 跡	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
おきつかはらひがし 沖塚原東B遺跡	とやまけん いみずし 富山県射水市 おきつかはら 沖塚原	016203	203036	36° 45' 06"	137° 04' 30"	180820 181226	2,300m ²	斎場建設事業
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
沖塚原東B遺跡	集 落 跡	中世	柵址1条 掘立柱建物址2棟 井戸8基 土坑6基、溝18条	縄文土器、弥生土器 土師器、珠洲、瀬戸美濃 白磁、青磁、越中瀬戸 肥前陶器、肥前磁器 銅錢、漆器椀、櫛、曲物 箸、部材、井戸側、編物	13世紀後半から 14世紀前半にかけての区画溝をもつ集落址の検出			

沖塚原東B遺跡発掘調査報告

— 射水市斎場建設事業に伴い埋蔵文化財発掘調査 —

2019(平成31)年3月15日 発行

編 集 株式会社エイ・テック

〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク12番地

☎0766-62-0388

発 行 射水市教育委員会

939-0294 富山県射水市新開発410番地1

☎0766-51-6637

印 刷 中村印刷工業株式会社